平成5年度

青龍古墳調査報告書

～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～

1994年3月

善通寺市教育委員会

序

善通寺市内には数多くの埋蔵文化財が残されており、これらが発掘調査されるたびに新たな事実の発見があり、そして新たな謎の解明が始まります。

今回調査された吉原町の「青龍古墳」は、平地に築造された巨大な古墳で、周庭帯を伴い二重の濠を有すると云われ、前方後円墳である可能性が取り沙汰されていました。ところが発掘調査の結果はまったく意外なものでした。

調査の結果は、青龍古墳に二重の濠はなく、前方後円墳でもないということで少々残念なような気がしますが、濠ではなく広い周庭部を有する珍しい大円墳であることが判明しました。この地にはどのような豪族が活躍していたのでしょうか。

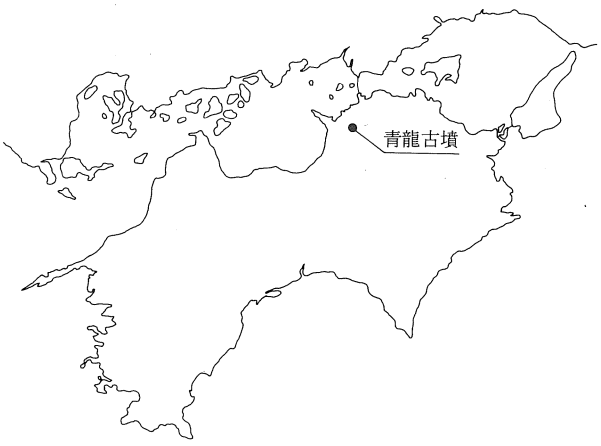
また、吉原町には四国を代表する中世の山城跡として史跡指定を受けた「天霧城跡」がありますが、青龍古墳は天霧城が築かれた頃、何らかの目的で人工的に大規模に改変されたものと考えられます。

戦国時代に、その地の利を生かし古墳に手を加えて利用するという例は全国に幾つか確認されているようですが、この古墳を砦として改修した集団やその目的について、新たな事実と共に謎は深まります。

このたびの善通寺市内遺跡発掘調査事業実施にあたり、ご協力をたまわりました鷺井神社の関係者及び周辺地権者の方々、また報告書刊行にあたり、ご指導をたまわりました諸先生各位に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査に携われた調査関係者の皆様のご苦労にも心から感謝申し上げます。

平成６年　３月３１日

善通寺市教育委員会
教育長　勝　田　英　樹





第1図　青龍古墳及び周辺俯瞰(南上空から)



第2図　青龍古墳西側の状況 ～左側から墳丘・周庭・土塁～(北西から)



第3図　第1トレンチ～手前から周庭・土塁・堀～(西から)



第4図　直線的に改変された古墳北側の地形と第5トレンチ(西から)
～鋭角的にたちあがる土塁状の壁が続く～

例　　言

1．本書は善通寺市教育委員会が国庫補助事業として実施した、埋蔵文化財調査事業（善通寺市内遺跡発掘調査事業）の発掘調査報告書である。

2．本事業は善通寺市吉原町1705(鷺井神社境内)及びその周辺部に所在する青龍古墳において平成５年11月15日から平成６年３月31日まで実施された。

3．本書の編集作成は善通寺市教育委員会文化振興室主事笹川龍一が行った。

4．補助事業の中で実施された、墳丘及び周辺部の測量調査及び遺物の実測は四国学院大学考古学研究会の協力を得て笹川が行った。

5．本事業実施にあたっては、次の方々にご協力頂いた。記して謝意を表します。

鷺井神社宮司：金森重昭

（敬称略・順不同）

鷺井神社総代：西山成賀、尾崎芳男、片山　博、高島正和、福崎與市、村井　守、
森　　博、村杉輝夫、田中　亘、音泉　潔、高口安市、砂古口恒

地権者：金森　斉、三木政徳、山田悦男、森江秀行、天雲　廣、山口スエノ、
高口敏高、野村光雄、森江光章、国重利正、森　伸二

また、本書の編集にあたっては、次の方々・機関より多大な御指導・御援助並びに資料提供を得た。記して謝意を表します。（敬称略・順不同）

香川県教育委員会、香川県埋蔵文化財調査センター、四国学院大学考古学研究会、
廣瀬常雄、國木健司、片桐孝浩、東　信男、竹森義治、滝安勝見

調査参加者：石村　守、中山能照、井原義春、井原康夫、三好光彦、岡崎熊市、
藤沢　進、山田金太郎、竹森ミユキ、岩本希世子
（四国学院大学考古学研究会）
蔵崎直哉、佐伯正樹、山岡大祐、木村朋樹、宮脇　勝、内山賢一、
福庭紳介、矢野ゆかり、二神千春、矢野由紀子、瀬尾祐子、真鍋富子

目　　次

序（１頁)･カラーグラビア（3･5頁)･例言(7頁)･目次(8～9頁)

第一章　遺跡周辺の地理と歴史……10
第二章　調査の概要……16
　①　調査に至る過程……16
　②　墳丘及び周辺地形測量調査……18
　③　墳丘及び周辺部の発掘調査……20
　④　中世以降の地形改変……30
第三章　ま　と　め……33

挿　図　目　次

第５図　調査地周辺遠景……10
第６図　調査地と周辺の主要遺跡……13
第７図　青龍古墳周辺地形測量図……17
第８図　青龍古墳地形測量図……19
第９図　トレンチ配置図……21
第10図　第１トレンチ実測図……23
第11図　第２トレンチ実測図……24
第12図　第３トレンチ実測図……24
第13図　第４トレンチ実測図……25
第14図　第５トレンチ実測図……25
第15図　第６トレンチ実測図……26
第16図　第７トレンチ実測図……26
第17図　第８トレンチ実測図……27
第18図　第９トレンチ実測図……27
第19図　出土遺物実測図①(埴輪片・須恵器片・土師器片)……28
第20図　墳丘及び周庭部推定復元図……29
第21図　出土遺物実測図②(須恵器片･土師器片)……30
第22図　青龍古墳周辺中世城郭等位置図……32

図 版 目 次

第23図　青龍古墳周辺部航空写真……36
第24図　鷺の井と青龍古墳遠景……37
第25図　青龍古墳遠景……37
第26図　鷺井神社境内……38
第27図　鷺井神社裏側に残存する墳丘……38
第28図　古墳南端の状況(左から堀と土塁)……39
第29図　古墳南西端の状況(手前から堀・土塁)……39
第30図　古墳南側周庭部の状況(左から土塁・周庭部・墳丘)……40
第31図　古墳西側の状況(手前から周庭部・墳丘)……40
第32図　古墳西側周庭部の状況(左から墳丘・周庭部・土塁)……41
第33図　古墳北側周庭部の状況(左から周庭部・改変地形・墳丘)……41
第34図　墳丘北側部の改変地形……42
第35図　古墳北端の状況……42
第36図　古墳西端の土塁の状況……43
第37図　古墳西端周庭部と土塁の状況……43
第38図　境内での発掘調査作業風景……44
第39図　第１トレンチ西側(周庭部)検出状況……44
第40図　第１トレンチ東側(土塁と堀)検出状況……45
第41図　第１トレンチ東側(土塁断面)検出状況……45
第42図　第１トレンチ東側(堀と埋土断面)検出状況……46
第43図　第２トレンチ検出状況(検出面は周庭部埋土上層)……46
第44図　第３トレンチ検出状況(墳丘東側周庭部)……47
第45図　第４トレンチ検出状況(墳丘北側改変地形)……47
第46図　第４トレンチ南端の版築状土層……48
第47図　第５トレンチ検出状況(墳丘北西側改変地形)……48
第48図　第６トレンチ検出状況(墳丘北側周庭部)……49
第49図　第６トレンチ土層堆積状況……49
第50図　第７トレンチ検出状況(墳丘北西側周庭部)……50
第51図　第８トレンチ検出状況(墳丘南西側裾部・埴輪片と礫の出土状況)……50
第52図　第９トレンチ検出状況(墳丘南側周庭部)……51
第53図　第９トレンチ土層堆積状況……51
第54図　周庭部埋土下層から出土した埴輪片……52
第55図　周庭部埋土上層から出土した須恵器及び土師器片……52

第一章　遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の空海が誕生した土地として有名な田園都市であり、総本山善通寺の門前町として発達している。

東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壌は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70～80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以降の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には希に縄文土器片が包含されていることが知られていたが、近年実施された四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したものであることが確認されている。

また、善通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する雨霧山、西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並んだおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ケ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ、古くから信仰の対象であったことが伺える。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。



第５図　調査地周辺遠景

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も全く不明の状態であるが、出土した土器片については、畿内第1様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。

また、これらの遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は2～3kmを計るが、当時の復元海岸線が現在の標高5mあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されており、現在のところ善通寺市の古代文化は約3,000年前まで遡ることができる。

善通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中枢的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして、ここから東には九頭神遺跡・稲木遺跡・石川遺跡と続いているが、いずれの遺跡も近年までは本格的な調査は実施されておらずその詳細は明らかにされていなかった。

しかしながら、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児壺棺十数点・多数の土器、石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に、国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。

旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が強いばかりか、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連続性が考えられる県下でも例のない存在であることが知られている。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが解り、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群でこれまでに実施された発掘調査を順に紹介すると、総本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡の調査から始まる。ここでは弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行なわれたことや、古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。続いて、昭和58年には遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村廃寺(伝導寺跡)の発掘調査が実施され、寺域の北端と、更にその下層では弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出された。

昭和59年には善通寺西遺跡から弘田川沿いの600m程下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘調査が実施されたが、ここでは約1,500㎡の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40

棟以上の竪穴住居・小児壺棺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘建柱建物跡2棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳の基底部などが発見され、特に弥生時代終末期の竪穴住居からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる仿製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏃・多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500ｍ程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壺棺墓3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。

ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての中規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500ｍあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年10月から昭和63年1月まで都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の竪穴住居や小児壺棺墓・箱式石棺等が確認されている。

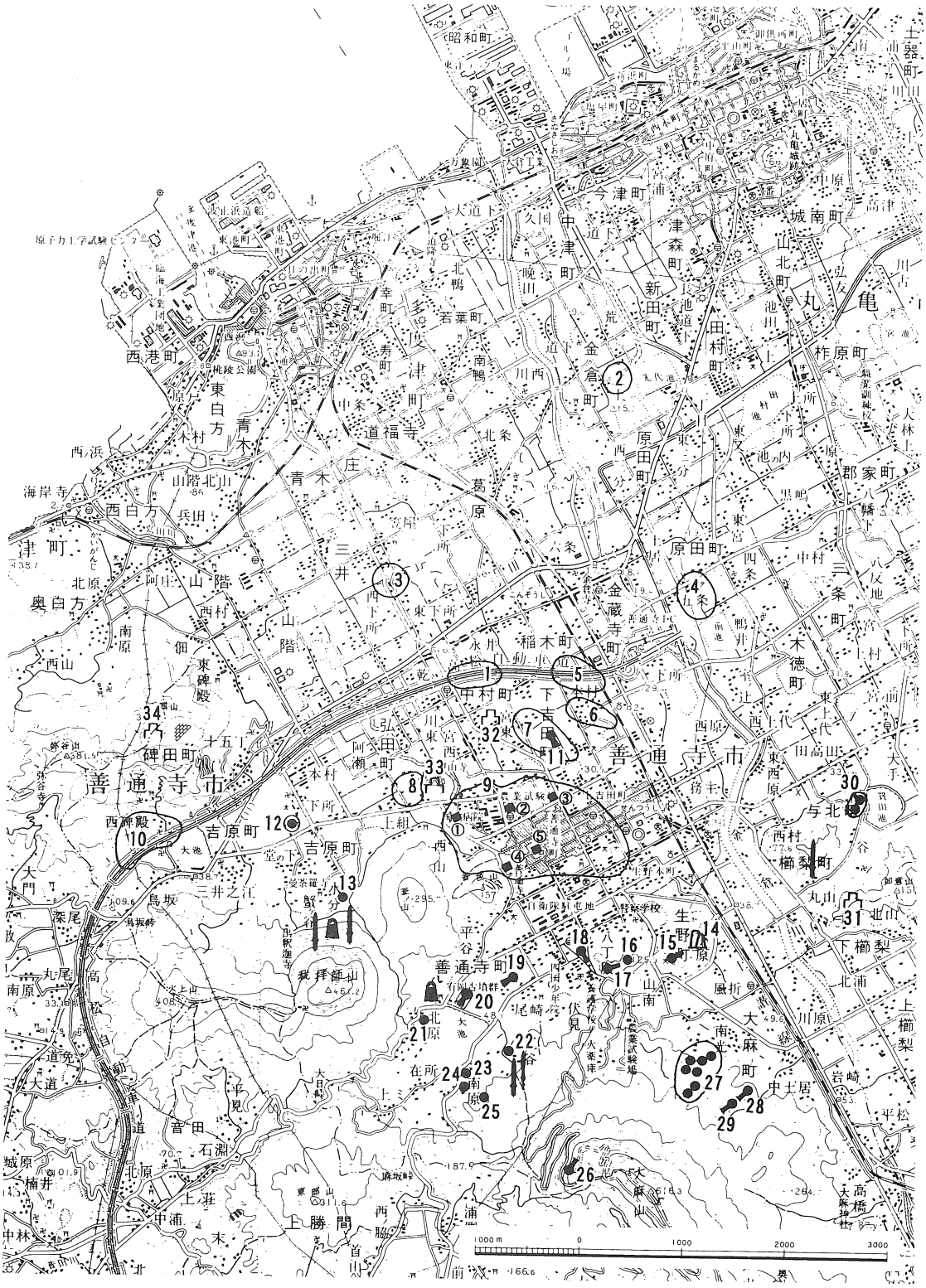
九頭神遺跡から東方500ｍあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。

ここから北方に隣接する稲木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年5月から昭和60年3月にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二回に分けて実施されており、やはり弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居群や墓地、中世の建物跡群が多数確認されている。こうした集落遺跡群は旧地形をみると、いずれも旧河道と旧河道の間に形成された微高地に営まれたものであることがわかるが、これまでの調査結果をみるといずれも同時期に併存したものであることもわかる。従って弥生時頃の善通寺周辺部には、“大集落”というよりはむしろ“地方都市”が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅剣3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅剣2口・細形銅剣5口・中細形銅鉾1口の計8口、我拝師山遺跡では計3カ所から平形銅剣5口・銅鉾１口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸１口など、青銅器が数多く出土しており、旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目されている。

1. 永井遺跡
2. 中ノ池遺跡
3. 三井遺跡
4. 五条遺跡
5. 稲木遺跡
6. 石川遺跡
7. 九頭神遺跡
8. 甲山北遺跡
9. 旧練兵場遺跡群
   ①彼ノ宗遺跡
   ②仙遊遺跡
   ③仲村廃寺(白鳳)
   ④善通寺西遺跡
   ⑤善通寺伽藍(奈良)
10. 矢ノ塚遺跡
11. 下吉田神社古墳
●12. 青龍古墳
13. 大塚池古墳
14. 磨臼山祭祀遺跡
15. 磨臼山古墳[史跡]
16. 鶴ガ峰山頂古墳
17. 鶴ガ峰4号墳[史跡]
18. 丸山古墳[史跡]
19. 王墓山古墳[史跡]
20. 菊塚古墳
21. 北原古墳
22. 瓦谷1号墳
23. 御館神社古墳
24. 宮ガ尾古墳[史跡]
25. 宮ガ尾2号墳
26. 野田院古墳[史跡]
27. 大麻山椀貸塚
28. 大麻山経塚
29. 陣山古墳群
30. 宝幢寺跡(白鳳)
31. 櫛梨城跡(中世)
32. 仲村城跡(中世)
33. 甲山城跡(中世)
34. 天霧城跡(中世)[史跡]

:銅鐸出土地　:銅剣出土地　:銅矛出土地



第６図　調査地と周辺の主要遺跡(1:50,000)

古墳時代に入ってもこの地の勢力は衰えず、市内だけでも400基を越える古墳が存在し、中でも香色山・筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず古段階の古墳としては、大麻山山麓を中心に大麻山椀貸塚、大麻山経塚、野田院古墳、御忌林古墳、大窪経塚古墳、丸山1号・2号墳など数多くの積石塚が築かれているが、御忌林と丸山2号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している点でも注目できる。中でも野田院古墳は大麻山北西麓(標高405ｍ)のテラス状平坦部という全国的にも有数の高所に立地する丸亀平野最古段階の前方部盛り土後円部積石墳である。

また、有岡地区の平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれている。北東から南西方向に順に生野鑵子塚古墳（消滅)・磨臼山古墳・鶴が峰2号墳（消滅)・鶴が峰4号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳が知られており、その状況から同一系譜上の首長墓群と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた王墓山古墳は一際目を引く存在である。

古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現するが、中には宮が尾古墳に代表されるような線刻画で装飾された横穴式石室が計8基確認されており、様々な点で興味は尽きない。

この頃の人々の生活の場は、後期を中心とした弥生時代の集落域と重複しており、旧練兵場遺跡をはじめ、善通寺市街地から北に広がる水田地帯で数多くの集落遺跡が確認されており、有岡地区を中心に各地に立派な古墳群を残した集団と各集落との関係が注目されている。

古墳時代になると弥生時代に開始された稲作文化は完成期を迎え、丸亀平野という肥沃な生産基盤を背景に、特定の有力者が独自の技術により潅漑治水事業等を行い耕作面積を増大させ、地域を代表する権力者として生まれ変わり、有岡地区一帯に数多くの古墳を築いた。この頃の丸亀平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯直一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯一族の一代系譜の墓する考えが有力である。

やがて仏教の伝来に伴い古墳が造られなくなるが、既に白鳳期には佐伯の氏寺である仲村廃寺(伝導寺跡)が旧練兵場遺跡の一角に建立される。しかしながらこの寺は短期間で消滅してしまい、その際に500ｍ程南に移転されたものが現在の善通寺伽藍ではないかと考えられている。

奈良時代末頃佐伯氏に弘法大師(空海)が誕生したことによって、平安時代から室町時代にかけては門前町として栄え、鎌倉時代から室町時代初期にかけて寺院の最盛期を迎え、地名も寺名そのまま善通寺村となるが、戦国時代には殆どの寺院は焼失してしまう。

寺社の復興は江戸時代に徳川幕府が封建制度を確立してからであり、この頃四国八十八カ所巡礼や金毘羅参りが全国的な信仰行事となる。

明治29年には第十一師団が設置され、門前町に軍都としての性格を帯るようになったが、このため道路や鉄道網が整備された。そして善通寺町として都市化が始まり、昭和29年3月31日に竜川村・与北村・筆岡村・吉原村と合併により市制が施行され、善通寺市が誕生した。

参考文献

『善通寺市の古代文化』	善通寺市	1973年11月
『善通寺市史』	善通寺市	1977年 7月
『中ノ池遺跡発掘調査報告書』	丸亀市教育委員会	1982年 3月
『香川叢書・考古篇』	香川県教育委員会	1983年 3月
『王墓山古墳調査概報』	善通寺市教育委員会	1983年 3月
『五条遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1983年11月
『仲村廃寺発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1984年 3月
『彼ノ宗遺跡』	善通寺市教育委員会	1985年 3月
『仙遊遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1986年 3月
『九頭神遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1988年 3月
『稲木遺跡』	稲木遺跡発掘調査団	1989年 3月
『仲村廃寺』	善通寺市教育委員会	1989年 3月
『史跡有岡古墳群(王墓山古墳)保存整備事業報告書』	善通寺市教育委員会	1992年 3月
『史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)調査報告』	善通寺市教育委員会	1993年 3月
『御館神社古墳発掘調査報告』	善通寺市教育委員会	1993年 3月

～四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告～

『中村・乾・上ノ坊遺跡』 第一冊	香川県教育委員会	1987年 3月
『矢ノ塚遺跡』 第三冊	香川県教育委員会	1987年 3月
『稲木遺跡』 第六冊	香川県教育委員会	1989年 3月
『永井遺跡』 第九冊	香川県教育委員会	1990年12月

第二章　調査の概要

①調査に至る過程

前述したように善通寺市内には数多くの古墳が残り、その大半は市街地南西部の香色山・筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区に集中していているが、これ以外にも幾つかの地域にその勢力を異にすると考えられる古墳群が確認されている。

有岡古墳群に次いで注目されるのは、この北側に位置する吉原地区の古墳群である。吉原地区は香色山・筆ノ山・我拝山及び中山・火上山（五岳山）北麓と天霧山南麓に挟まれた小扇状地状地形を呈する平野部であり、扇状地の要部分は西讃岐から陸路丸亀平野に至る重要な峠として機能している。

この吉原区域には古式の大窪前方後円墳（積石塚）を始め、二重の濠を有するとされる中期の青龍古墳、後期では吉原椀貸塚（巨石墳）など各時代の首長墓が残るが、有岡地区と比較するとその数は極めて少なく、古墳時代における当地域の動向を知る上で極めて興味深い存在である。

矢原高幸氏の記録によれば、吉原区域の古墳は大半が山裾部から高所に散在しており、平地の古墳は耕地の開墾等により消滅したものも少なくないが、平野部の中央部には鷺井神社の境内地としてその地形が良く保存された青龍古墳が威容を誇っている。

鷺井神社の由来は古く、古記に「仁寿元年（851）年、現在の境内から東100ｍ程のところに一羽の青鷺が飛来し、ここに清水が吹き出していた。この清水は眼病に効果があるとの神託があり、住民は神水と崇めた。」と伝わっている。また、後に天霧城主香川信景の子（または一族の子）松之助頼景が眼を患った際、この神水により治癒したため、香川氏及び住民の厚仰するところとなったとも云わり、この頃青龍古墳を境内地とした神社の原型が誕生したものと考えられる。当初から青龍明神（青龍大権現）と称して少彦名命を祀っていたが、明治時代以降はこの地の小字「鷺ノ井」から鷺井神社とされ、境内地全域に広がる古墳は長く保存され現在に至っている。

しかしながら平成4年4月、この平野部を東西に走る四国横断道の完成に伴い青龍古墳周辺部でも西からほ場整備が進んでおり、近いうちに古墳付近にまで事業が及ぶ可能性も高まった。地形の外観から、遺構が境内地外の水田や畑にも広がっていることは明確ではあるが、本墳において調査が行われたことはなく、遺構の形態や範囲については不明であり、今後の開発行為にすみやかに対応するための資料を得る必要性が高まった。

また境内に数年前まで繁茂していた松の巨木の大半が松喰虫の被害を受けて全て枯れてしまったため、墳丘の崩壊は加速しているようにも思われる。そして社殿建設の際に削られた墳丘東側には竪穴式石室の一部が露出してしまっており、現状のままで放置すると主



第７図　青龍古墳周辺地形測量図

体部が崩壊してしまう恐れもあったため、市教育委員会では遺跡の重要性を考慮し、県教育委員会と協議の上、埋蔵文化財調査事業として国庫補助を得て遺構の確認調査を実施することになった。

②墳丘及び周辺地形測量調査

青龍古墳の地形は良く保存されており、その特殊な形状や大きさからこれまでにも様々な資料に紹介されてきた。内容を要約すると以下のとおりである。

その墳丘の一部は削平され、神社の境内地となっている。周辺は水田地帯であり、南側の我拝師山から派生した尾根の先端部に構築されている。付近の標高は約20ｍである。

墳丘の直径は約25ｍを計り、東側半分に社殿等が建設されているため旧地形が不明瞭であり、本墳が円墳か前方後円墳かを明らかにすることはできないが、恐らく円墳か帆立貝式古墳であろう。これに対して南北側と西側は比較的よく旧状を保っており、特に南側から西側にかけては周庭帯や二重に巡らされた濠の形状が明確である。

墳頂部は古い本殿があったとされ幾分削平を受けており、(現在の)本殿再建の際に削られた墳丘断面に主体部と思われる石材の一部が露出している。鉄刀片の出土も伝わる。

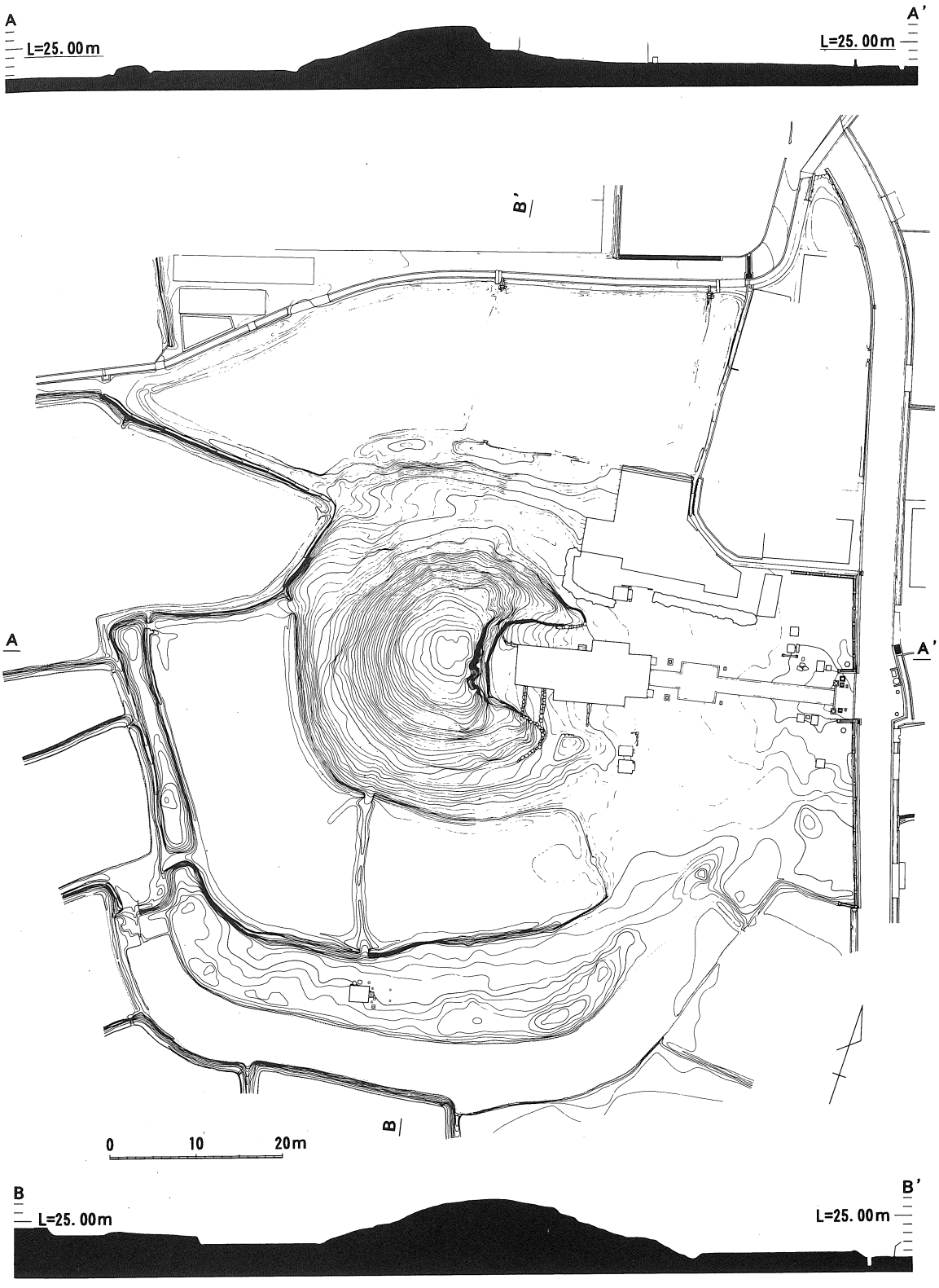
墳丘外面は表土の流出が著しく、埴輪片は確認されていないが、裾部において礫が多数みられるため葺石の存在が予想される。

墳丘周囲には幅18ｍの内濠若しくは周庭が見られるが、南側から西側では更に幅6ｍ程の周堤を経て幅6ｍ程の外濠が残るが、北側では１ｍ程低くなり、幅の広い濠若しくは周庭が見られるだけである。後世の開発によるものか、構築時の地形に影響されたものであるのかは不明である。

以上の内容を確認するために調査前に測量予定範囲を踏査したが、現在の地形が農地の開墾だけが原因で変形したものとは考え難く、また古墳時代後期の形態がそのまま残ると考えるにも、まことに奇異な形態である。

そこで、現地形の詳細を把握するために、関連遺構が残ると考えられる範囲内を高低差10㎝間隔の地形測量図に図化する作業を実施した。墳丘及び周辺部での作業は平成５年11月15日に開始し、下草･竹林等の伐採作業と並行して約10,300㎡の範囲で平板を用いて行い、12月25日に完了した。測量作業の結果は第８図と巻末折り込み付図に示したとおりである。

これによると、墳丘に接する幅の広い周庭状の平坦部は幾つかの畦で寸断されてはいるが、墳丘を取り巻く様子が瞭然としている。この平坦部は自然地形に伴う傾斜により、南側と北側では現状で1.5ｍ程の高低差が認められる。北側の周庭状平坦部端部に堤状の隆起や目立った地形の変化は認められず、テラス状の地形を呈している。



第８図　青龍古墳地形測量図

また、これまでに知られていた内容に加えて、南側の外濠はほぼ一定の幅を保ちながら多角形的に屈曲(①)し、これと並行して構築された周堤部(②)は遺構南側から西側にかけて除々に幅が狭まり外濠と共に突然削減する。周堤部が削減する部分から墳丘に向かい直角に陸橋状の畦(③)が延び墳丘と合流するが、墳丘側ではこの合流点から墳丘北側に幅の広い平坦地形(⑧)が続く。

陸橋状の畦は数箇所(④～⑦)に見られるが、④はごく最近の所産であり、⑤と⑥は水田の畦とも考えられる。⑦は北西部の集落と神社を結ぶ道として機能しており、参道として発達したものと考えられるが、墳丘に合流した場所にみられる幅の広い平坦部(⑧)は明らかに本墳の二段築の平坦部が大規模に拡張されたものであり、この北側は直線的に切られて崖状地形(⑨)を呈している。この斜面下は地形に沿って水路状に掘削(⑩)されており、現在も湿地化し珍しい片葉の葦が群生している。

以上のように、中期古墳独自の形態とは考え難い点が多く確認されたが、やはり後世の耕地開墾に伴い変形したとも考え難く、次にこれらを明確にするため、要所要所にトレンチを設定し地中に残る遺構の形態や性格の把握に努めた。

③墳丘及び周辺部の発掘調査

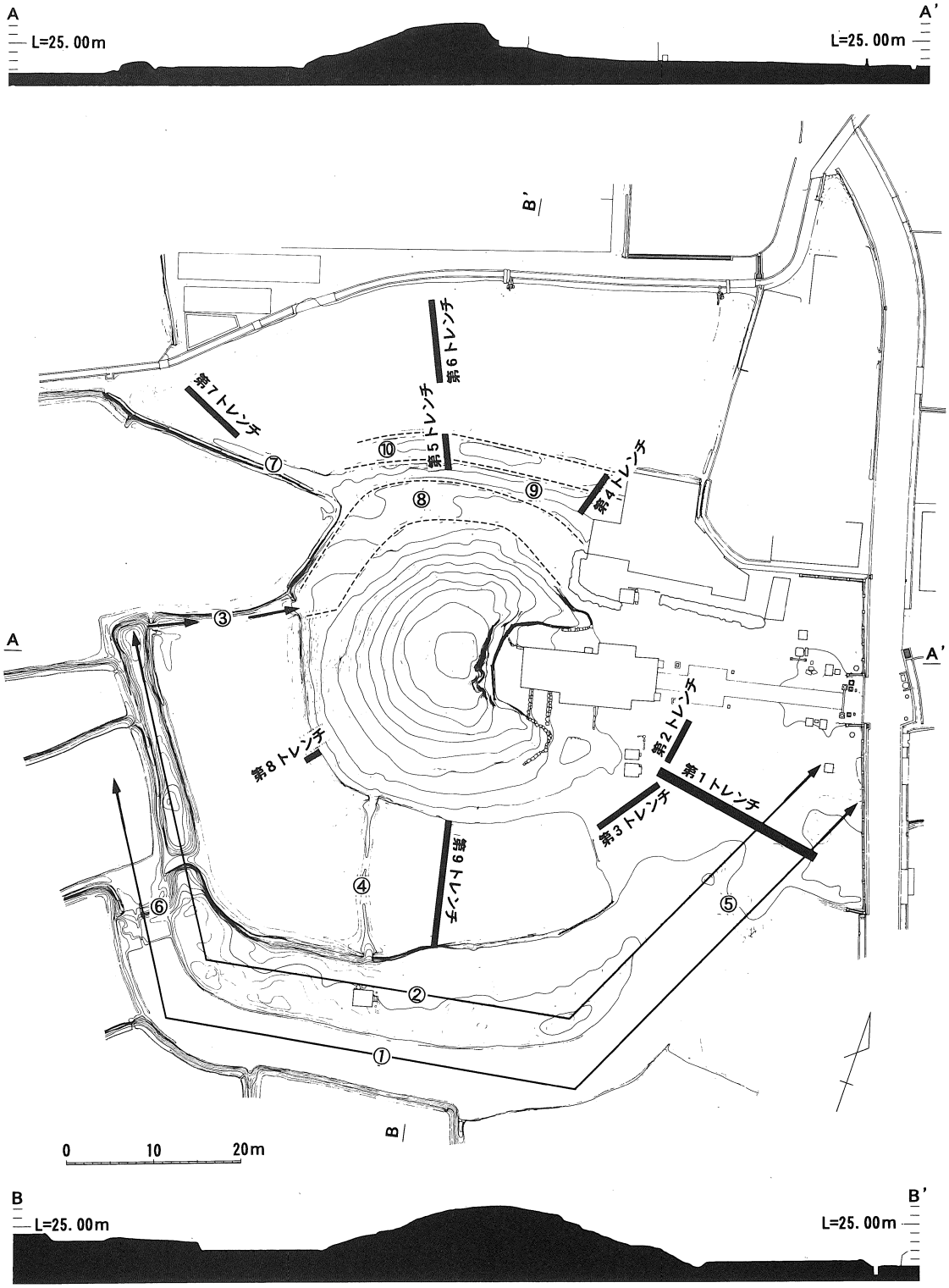
古墳及び関連遺構推定域内には神社・住居等の構造物の他、果樹等が栽培されている水田や畑等調査不可能な場所もあり、最小限度の面積で調査効率をより高めるため、各トレンチで確認された内容を検討した後に、次の調査区を設定する作業を繰り返した。

まず第１トレンチは、本墳の主形態を確認するために墳丘の中心と推定される場所から放射状に社殿東側に設定した。本墳が前方後円墳でなければ内濠、周堤、外濠の延長部を捉えることになり、その場合は各遺構の断面を観察することが目的となる。

第１トレンチを１ｍ程掘り下げたところ、東側の埋土が比較的軟質であるのに対して、西側の埋土が堅緻であった。そこで前方部の可能性を考え、第１トレンチ西端から北方に直行方位に第２トレンチを設定したところ第１トレンチと同様の結果が得られたので、続けて逆方向に第３トレンチを設定した。第３トレンチでは第１トレンチ・第２トレンチ同様の検出面が、濠若しくは周庭部の埋土上面であることが明らかであり、これを確認した後に第１トレンチの掘削を続行した。

第１トレンチ西端の掘削を続行したところ、埋土上層からは中世の土鍋片が多数、下層では出土遺物は希少ではあるが５世紀代のものと見られる須恵器片が１点と、最下層から埴輪片を含む土師器の小片が出土した。

遺構底部は以外に浅く、底部が平坦であること等から、本墳の構造は周濠ではなく周庭を伴う円墳のようである。その底部は東に向かって緩やかに上がり、続けて古墳南側に露出している周堤と外濠、それぞれの延長線上で同様の遺構が検出されたが、外濠の埋土は



第９図　トレンチ配置図及び遺構説明図

周庭部の埋土とは完全に異なりヘドロ状の軟質粘土であり、最下層付近から中世頃の所産とみられる土器片が出土している。

また周堤を詳細に踏査すると、崩壊した複数の箇所に中世頃の所産とみられる土器片が露出しており、外濠及び周堤と考えられていた遺構は後世の改変により生じたものである可能性が高まった。

次に、やはり後世の改変が予想される古墳北側裾部を検出し、墳丘の規模及び改変の様子を確認するために、墳丘北側のテラス状平坦地形の裾部二ケ所に第4トレンチと第5トレンチを設定した。

第4トレンチでは厚い腐食土や攪乱層の堆積があり、地表面下約1ｍで漸く遺構の一部を確認した。トレンチ南端では版築状の堅緻な比較的濃色の粘土の互層が検出されたが、この上部は北に急傾斜で下るように整形されているようである。この版築状土層下方は乳灰褐色粘土の地山の削り出しの斜面で、この裾部はＶ字形断面を呈する溝状遺構となっている。

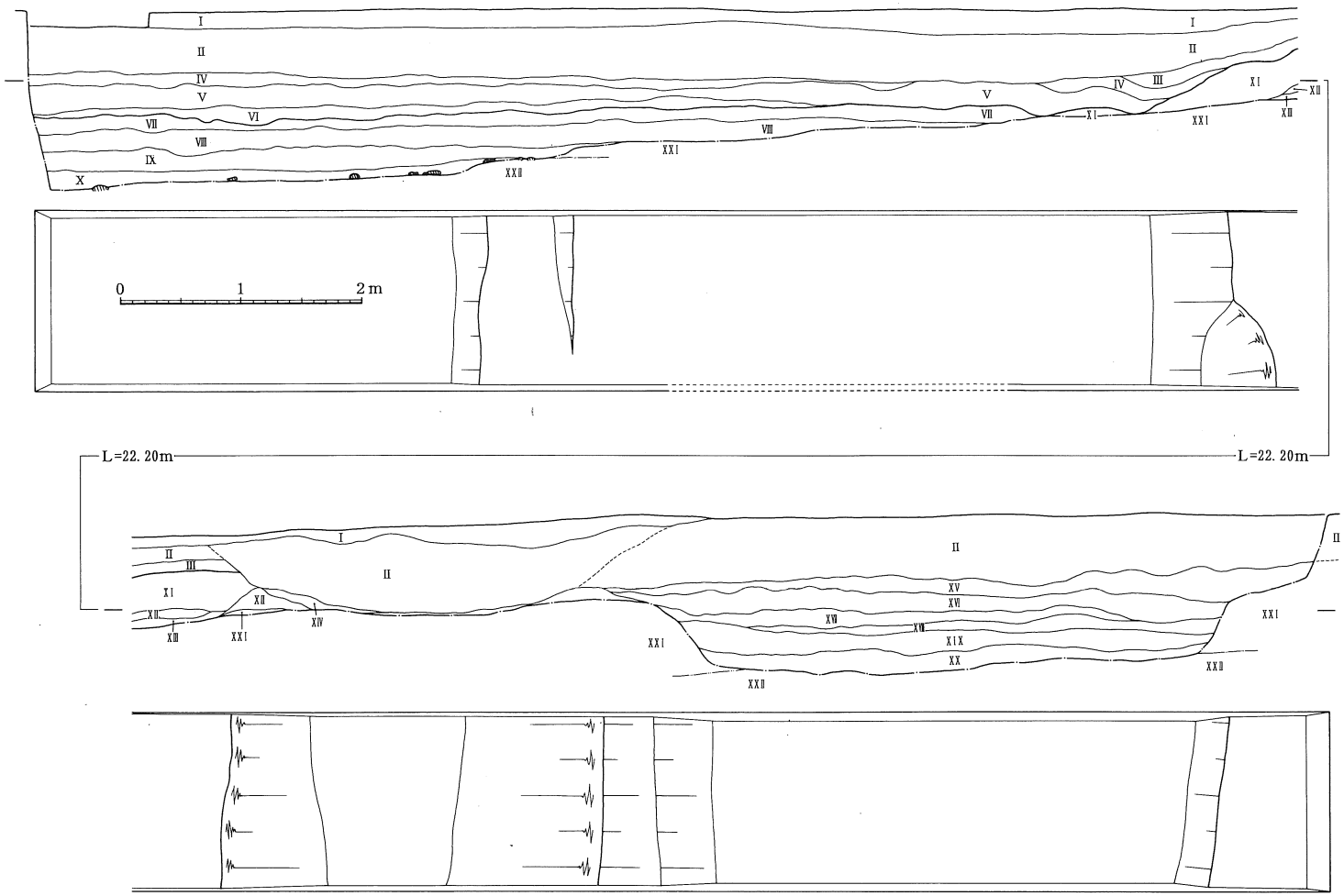
また第5トレンチでも類似した結果が得られた。両トレンチ間はこの状況が直線的に続くことから、後世の土地改変により古墳本来の地形は失われている可能性が高いが、改変の時期や目的については不明である。

続けて北側周庭部の状態を確認するために、第5トレンチの北側延長線上に第6トレンチを設定した。ここでは非常に浅く、地表面下70cm前後で黄灰色粘性粘土の地山層が検出された。この地山面は平らに整形されている。周庭北端部では灰褐色砂礫土が厚さ20～30cm程堆積しているものの目立った地形の変化はなく、現地形同様にテラス状に周庭部が広がるようである。

更にこの状況とその範囲を確認するために墳丘北西側に第7トレンチを設定したが、ここでは地山面は深く、表面下1.0～1.3ｍで検出された。下層部の状況はこの場所が自然流路であったことを示しており、古墳構築時にはⅧ層とⅨ層より下は自然埋没している。Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ層はその堆積状況や土の内容からはこの箇所の地形の乱れを整えるために置かれた整地層である可能性が高い。

この時点で経費や時間等を調整する必要が生じた。調査箇所が限定されることとなったが、後世の改変と考えられる外濠部や周堤部は現地形からある程度状況が把握できることから、残る時間で古墳南側の裾部を確認するために第8トレンチと第9トレンチを設定した。

第8トレンチでは周庭部に堆積した1ｍ程の土砂を除去すると、墳丘裾部に散乱した状態で、安山岩塊群と伴に埴輪片・土師器片が検出された。埴輪片は器壁は比較的厚いものの破片はいずれも小さく、その数も少ない。また下部の破片が殆ど含まれていないことや土砂の堆積が厚いことなどから、良好な保存状況で墳丘裾部付近に埋没していることも考



Ⅰ 整地層(花崗土層)

Ⅱ 攪乱層
(瓦片や礫を含む)

Ⅱ' 攪乱層
(炭化物を含む)

Ⅲ 明灰褐色砂質土層

Ⅳ 灰褐色砂質土層

Ⅴ 濃灰褐色砂質土層

Ⅵ 濃灰色砂質土層

Ⅶ 濃茶灰褐色粘土層
(土鍋片等を含む)

Ⅷ 黒茶褐色粘土層
(土鍋片等を含む)

Ⅸ 黒色粘性砂質土層

Ⅹ 暗黒色粘性砂質土層

ⅩⅠ 灰褐色砂質土層

ⅩⅡ 黒茶灰色砂質土層

ⅩⅢ 濃灰色砂質粘土層

ⅩⅣ 黒茶灰色砂質粘土層

ⅩⅤ 濃灰色粘土層

ⅩⅥ 暗灰色粘性粘土層
(5~10cmの円礫を含む)

ⅩⅦ 淡灰色砂礫層

ⅩⅧ 暗灰色砂性粘土層

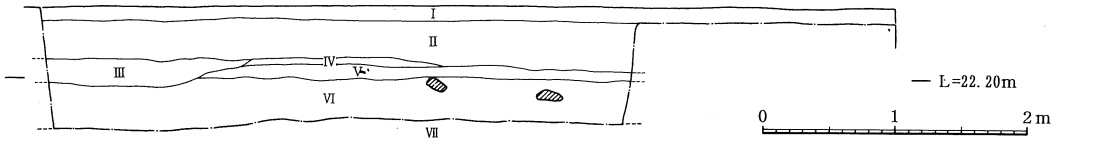
ⅩⅨ 濃灰色砂質粘土層
(土鍋片等を含む)

ⅩⅩ 青灰色砂質粘土層

ⅩⅩⅠ 灰褐色砂礫層
(比較的堅い地山)

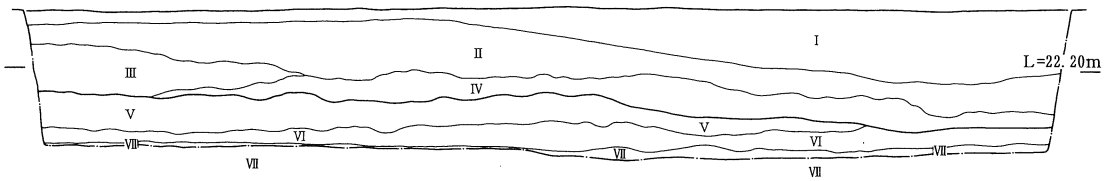
ⅩⅩⅡ 黄灰褐色粘性粘土層
(地山)

第10図　第1トレンチ実測図



I 整地層(花崗土層)
II 攪乱層(瓦片や礫を含む)
III 攪乱層(瓦片や礫を含む)
IV 淡灰褐色砂質土層
V 灰褐色砂質土層
VI 濃灰褐色砂質土層
VII 濃茶灰褐色粘土層(土鍋片等を含む)

第11図　第2トレンチ実測図



I 整地層(花崗土層)
II 攪乱層(瓦片や礫を含む)
III 灰褐色砂質土層
IV 濃灰褐色砂質土層
V 濃灰色砂質土層
VI 黒茶灰褐色粘土層
VII 濃茶灰褐色粘土層(土鍋片等を含む)

第12図　第3トレンチ実測図

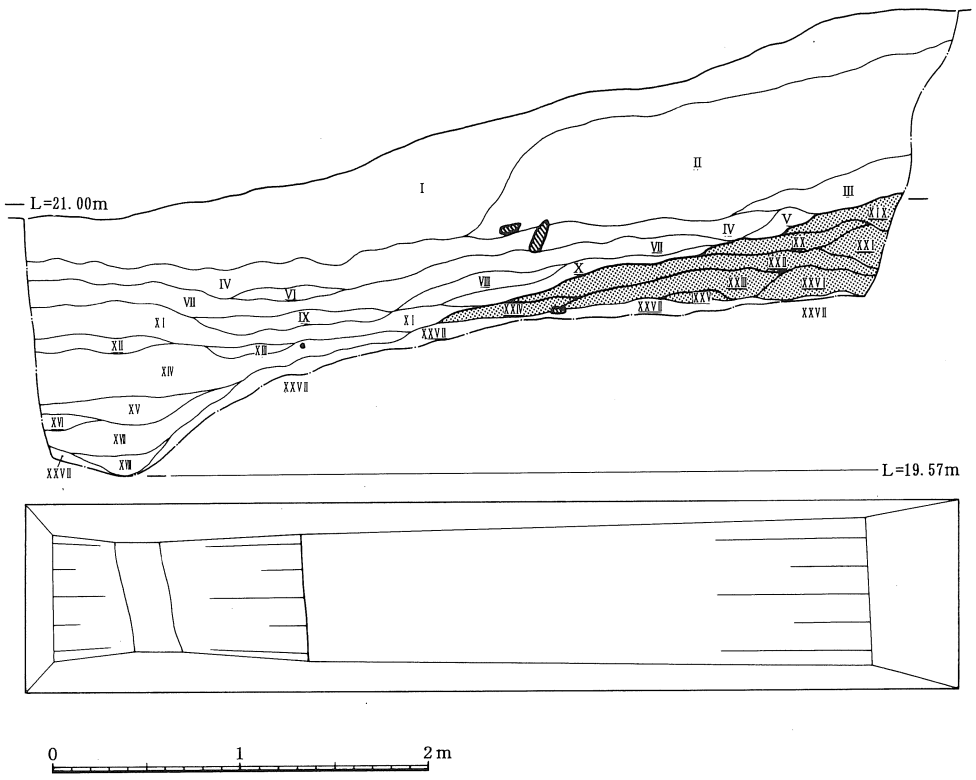
えられる。出土した遺物については後述する。

第９トレンチは現地形で周庭部と考えられる幅いっぱいに設定した。埋土上層からは土鍋等、多量の中世遺物が出土している。古墳裾部の状況は第８トレンチの結果と同様であるが、安山岩塊群は検出されたものの埴輪片等は出土していない。トレンチの南端では地山が緩やかに上がり、ここに埋土以外の人工的な盛土が確認された。

ここを周庭部端と見るとその幅は11～11.5m程であるが、人工的な盛土は後世に構築された周堤部に伴うものである可能性が高く、周庭部の変化も緩やかな傾斜である。北側の周帯部の幅が18m近くあることから、更に南に広がっていることが予想される。このことは第１トレンチの結果とも符合する。

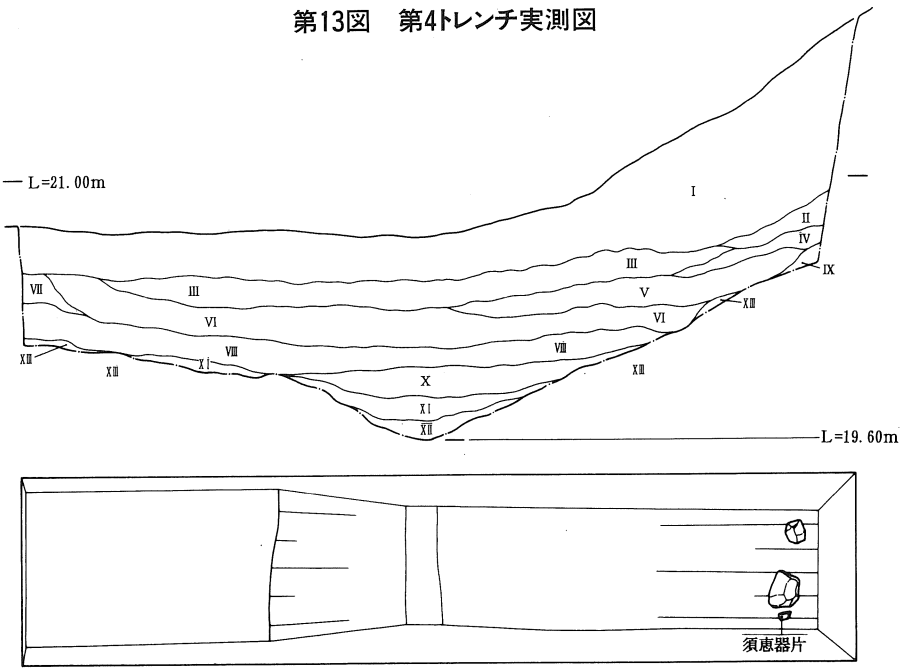
古墳南側から西側にかけて残る周庭部は現在は水田であるが、最近は耕作されておらず湿地化している。掘削時に湧水量が極めて多く、湧水点も極めて浅いことが確認されたが、これは各所に残された陸橋状の畦が現在も機能しているためと考えられる。

Ⅰ 腐食土層
Ⅱ 地下茎による攪乱層
Ⅲ 濃茶色土層
Ⅳ 濃灰色砂質土層
Ⅴ 濃茶色砂質土層
Ⅵ 暗灰色砂質土層
Ⅶ 灰褐色砂質粘土層
Ⅷ 暗灰褐色砂質粘土層
Ⅸ 暗灰色砂質粘土層
Ⅹ 灰褐色砂層
ⅩⅠ 暗灰色砂質土層
ⅩⅡ 濃灰褐色砂質土層
ⅩⅢ 濃灰色砂質粘土層
ⅩⅣ 濃灰褐色粘性土層
ⅩⅤ 濃灰色粘性粘土層
ⅩⅥ 暗灰色砂質粘土層
ⅩⅦ 暗灰色粘土層
ⅩⅧ 暗灰色粘性粘土層
ⅩⅨ 黒茶色砂質土層
ⅩⅩ 濃灰褐色砂質粘土層
ⅩⅩⅠ 灰褐色粘土層
ⅩⅩⅡ 濃灰褐色砂土層
ⅩⅩⅢ 濃灰褐色砂質土層
ⅩⅩⅣ 濃灰色砂土層
ⅩⅩⅤ 暗灰褐色砂質粘土層
ⅩⅩⅥ 濃灰色粘土層
(ⅩⅨ～ⅩⅩⅥは版築状で堅緻)
ⅩⅩⅦ 乳灰褐色粘土層(地山)

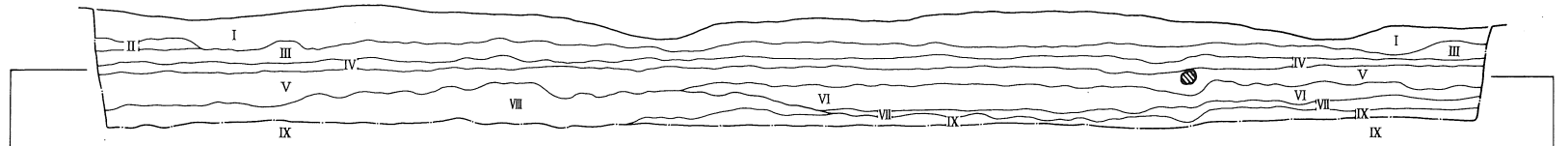


第13図　第4トレンチ実測図

Ⅰ 腐食土層
Ⅱ 乳灰色粘土層
Ⅲ 濃灰褐色粘土層
Ⅳ 灰褐色砂質粘土層
Ⅴ 灰褐色砂礫層
(近世遺物を含む)
Ⅵ 濃灰色粘土層
Ⅶ 灰褐色砂質土層
Ⅷ 暗灰色粘性粘土層
Ⅸ 明灰褐色砂質土層
Ⅹ 暗灰褐色粘性粘土層
ⅩⅠ 黒灰色粘性土層
ⅩⅡ 黒色粘性粘土層
ⅩⅢ 乳灰褐色粘土層(地山)



第14図　第5トレンチ実測図

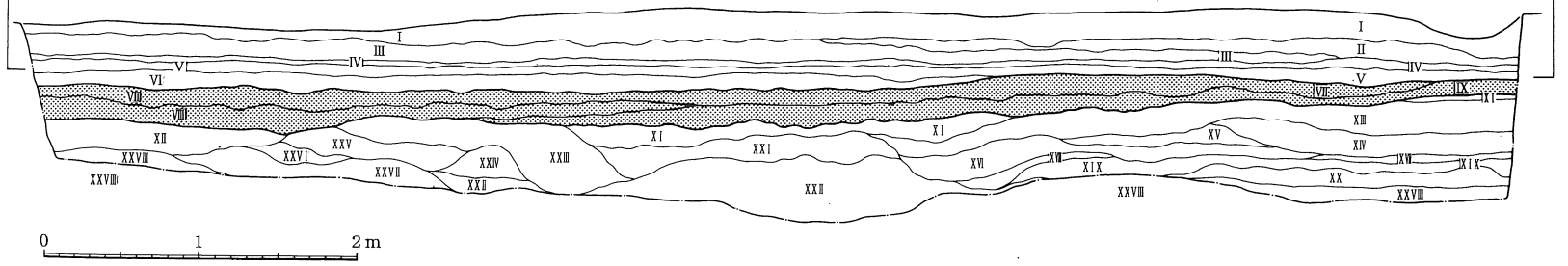


第15図　第6トレンチ実測図

I　濃灰色砂質土層(耕作土)
II　茶灰褐色砂質土層
III　淡灰褐色砂質粘土層
IV　明灰褐色砂質粘土層
V　濃茶灰色粘土層
VI　灰褐色砂質粘土層
VII　明灰色粘性粘土層
VIII　茶褐色砂礫土層
IX　黄灰色粘性粘土層(地山)

L=20.50m

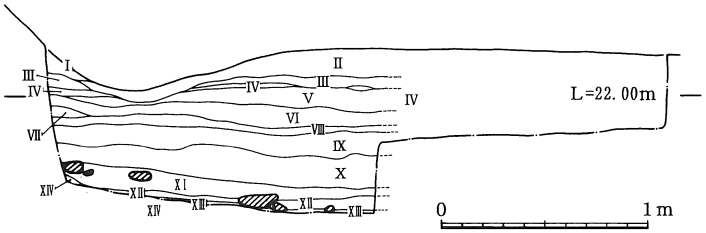
L=20.50m



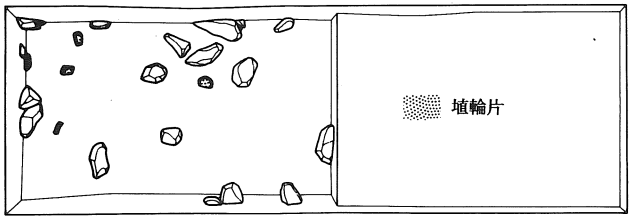
第16図　第7トレンチ実測図

I　濃茶色土層(耕作土)
II　淡灰褐色砂質土層
III　明灰色砂質土層
IV　明褐色砂質土層
V　明褐色砂質粘土層
VI　淡灰色砂質土層
VII　濃灰褐色砂質粘土層(整地層)
VIII　濃灰色砂質粘土層(整地層)
IX　濃茶灰色粘土層(整地層)
X　灰褐色砂層
XI　暗灰色砂質土層
XII　暗灰褐色砂質粘土層
XIII　暗茶灰色粘性粘土層
XIV　暗黒色粘性粘土層
XV　淡灰色砂質土層
XVI　暗灰色砂質粘土層
XVII　暗灰色粘性粘土層
XVIII　黒灰色粘性粘土層
XIX　濃灰色粘性粘土層
XX　暗灰色粘性粘土層
XXI　淡灰褐色砂層
XXII　明灰褐色砂層
XXIII　淡灰褐色砂礫層
XXIV　淡灰褐色砂層
XXV　乳灰褐色砂層
XXVI　茶灰褐色砂質土層
XXVII　茶灰褐色粘性土層
XXVIII　淡灰色砂質粘土層(地山)

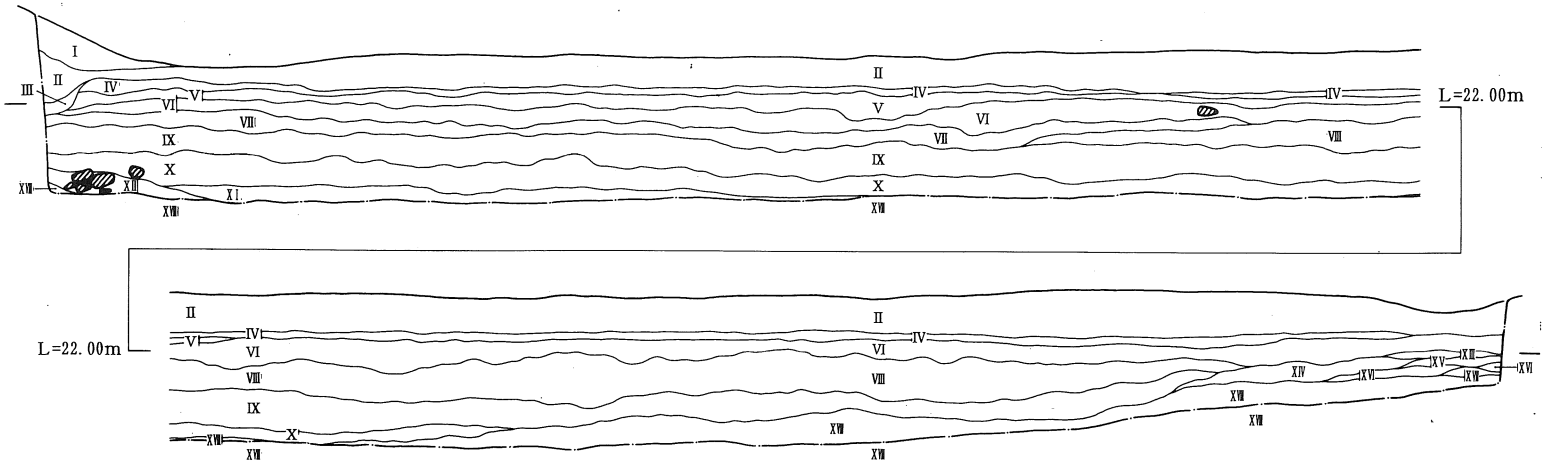
第17図　第8トレンチ実測図



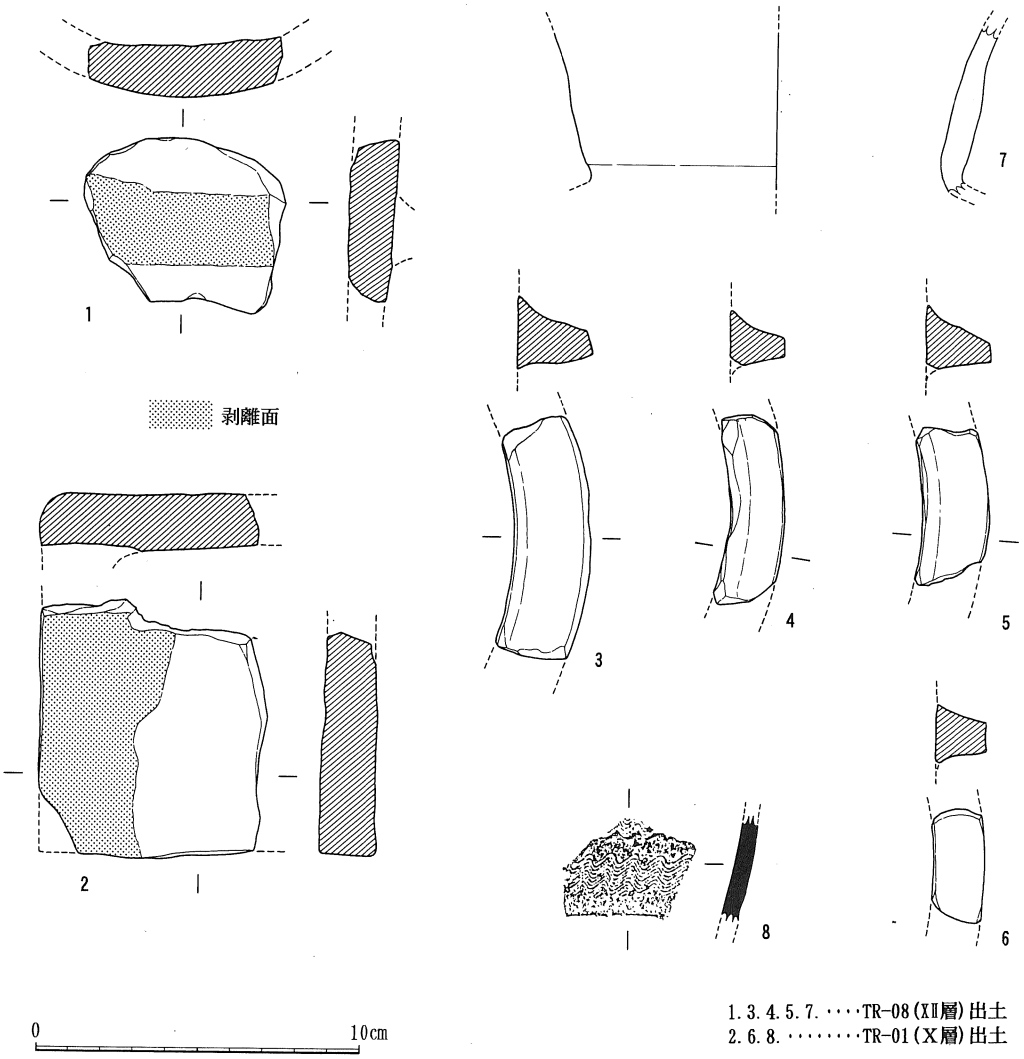
Ⅰ 腐食土層
Ⅱ 濃茶色土層(耕作土層)
Ⅲ 濃灰色砂質土層
Ⅳ 明灰褐色砂質土層
Ⅴ 明灰褐色砂質粘土層
Ⅵ 淡灰色砂質土層
Ⅶ 濃灰色砂層
Ⅷ 濃灰褐色砂質土層
Ⅸ 濃灰色砂質土層
Ⅹ 濃灰色砂質粘土層
ⅩⅠ 暗灰褐色砂質粘土層
ⅩⅡ 黒色粘性土層
ⅩⅢ 黄灰色砂層
ⅩⅣ 黄灰色砂質土層(地山)



Ⅰ 腐食土層
Ⅱ 濃灰色砂質粘土層(耕作土層)
Ⅲ 暗灰色砂質粘土層
Ⅳ 明灰褐色砂質粘土層
Ⅴ 明灰色砂質粘土層
Ⅵ 茶灰褐色砂質粘土層
Ⅶ 灰褐色砂質土層
Ⅷ 暗灰褐色砂質土層
Ⅸ 暗灰色砂質土層
Ⅹ 黒灰色砂質土層
ⅩⅠ 黒色砂質土層
ⅩⅡ 黒色砂質粘土層
ⅩⅢ 淡灰色砂層
ⅩⅣ 明灰褐色砂質土層
ⅩⅤ 灰褐色砂層
ⅩⅥ 濃灰色砂層
ⅩⅦ 明灰褐色砂層
ⅩⅧ 黄灰色砂質土層(地山)



第18図　第9トレンチ実測図

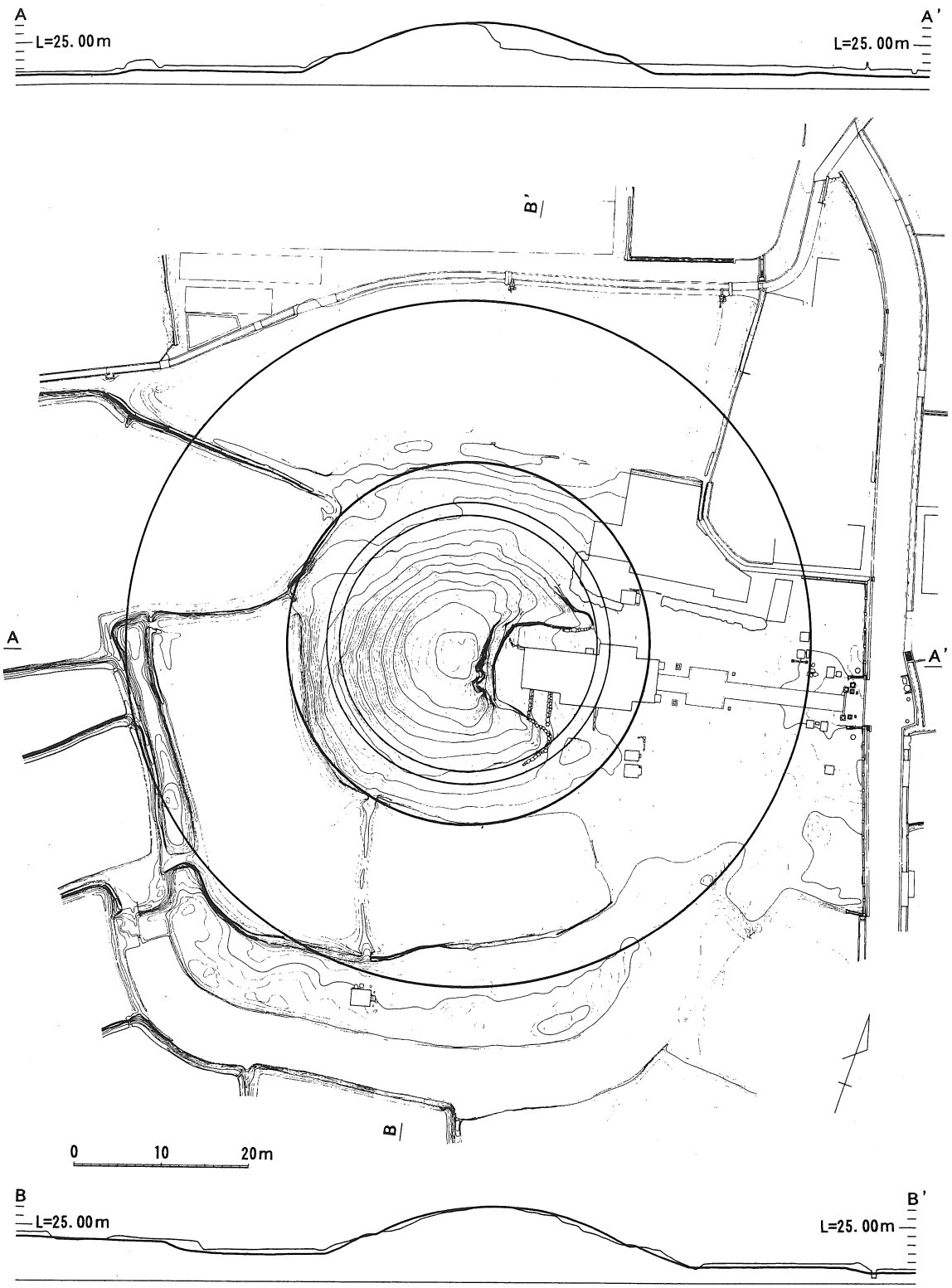


第19図　出土遺物実測図①(埴輪片・須恵器片・土師器片)

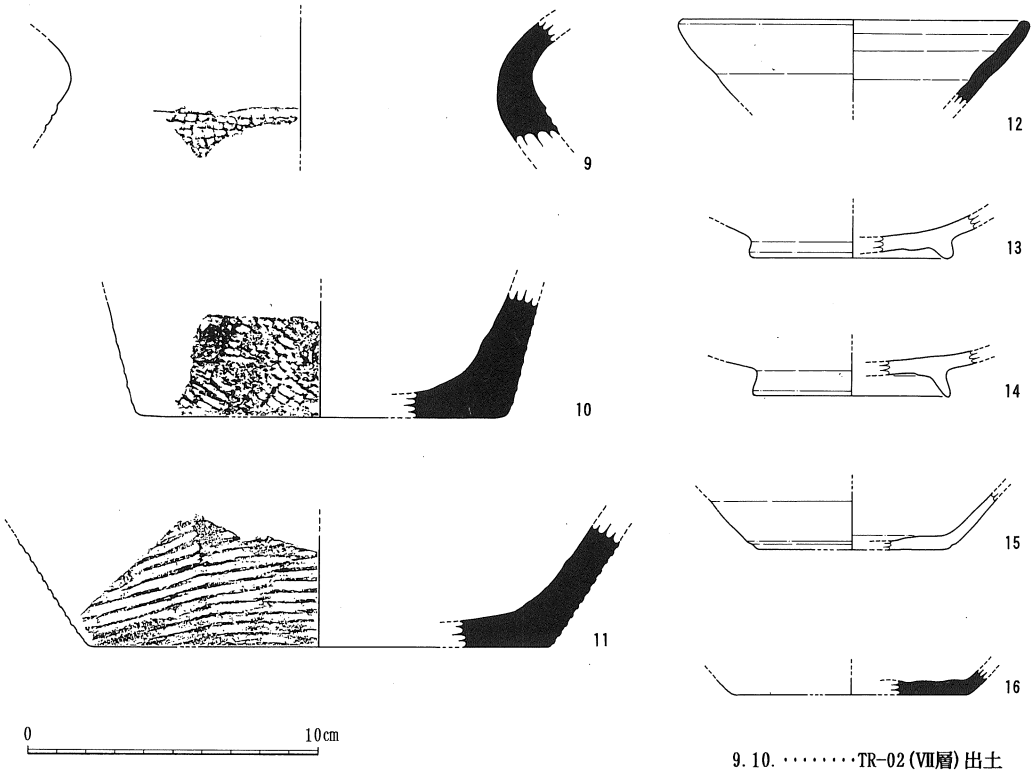
本墳に伴うと考えられる遺物は第19図に示した埴輪片・須恵器片・土師器片等である。1～6は円筒埴輪片であるが、表面の調整等は不明である。剥落したタガの幅は非常に大きく形象埴輪に伴うものか、若しくは壺形埴輪である可能性が考えられる。付近の壺形埴輪は岡山県真庭郡の四つ塚十三号墳にその使用例が知られているが県下には例がない。

2は形象埴輪片である。囲形か家形が想定できる。7は壺形土師器の口縁部である。

また、トレンチによる調査の結果、本墳は周庭帯を有する二段築成の円墳であることが確認できた。最高点は27.14m、傾斜地に築造されたため周庭部(墳丘裾部)は南側で21．55m、北側 20.15mと南側が 1.4m程高くなっている。墳丘規模は一段目直径約42m・二段目直径約 29m、高さは現状で一段目が 3.5m、二段目が約3mを計る。周庭帯の幅は約18



第20図　墳丘及び周庭部推定復元図



9.10.……TR-02(Ⅶ層)出土
11.16.……TR-09(Ⅸ層)出土
12.13.14.……TR-02(Ⅶ層)出土
15.……TR-01(Ⅷ層)出土

第21図　出土遺物実測図②(須恵器片・土師器片)

mと推定されるが、幅が一定か否かは古墳南側の土地改変が著しいため不明である。

以上の結果や出土遺物等から、本墳の構築時期は5世紀の第3四半期頃が想定できる。

④中世以降の地形改変

これまで述べてきたように、青龍古墳は5世紀後半に築造された後にしばらくして大規模な地形の改変を受けている。その時期と目的については現在のところ明らかにすることはできないが、周庭部の埋土から出土した上記の遺物に注目したい。

15は10世紀頃の所産、9.10.11.16は11世紀後半から12世紀頃の所産、12.13.14は12世紀末から13世紀前半頃の所産とみられ、9世紀半ばから機能していると伝わる鷺井神社に伴う遺物の可能性が考えられるが、神社として活用するためにこれ程大規模な改変を行う必要性があったかどうかは疑問である。

また、周堤と考えられていた遺構や、改変を受けた場所からは更にそれ以後の時代の土器片が出土することから、本墳が本格的に改変されたのは南北朝～戦国時代頃ではないかと考えれる。

この吉原町には四国を代表する中世城跡「天霧城跡」があり、1558(永禄元)年の三好

実休(阿波）による天霧攻めや、1578(天正6)年の長宗我部元親(土佐)の讃岐進攻など、戦闘が多発した場所であり、付近に甲山城跡や仲村城跡等の関連遺跡が残る。

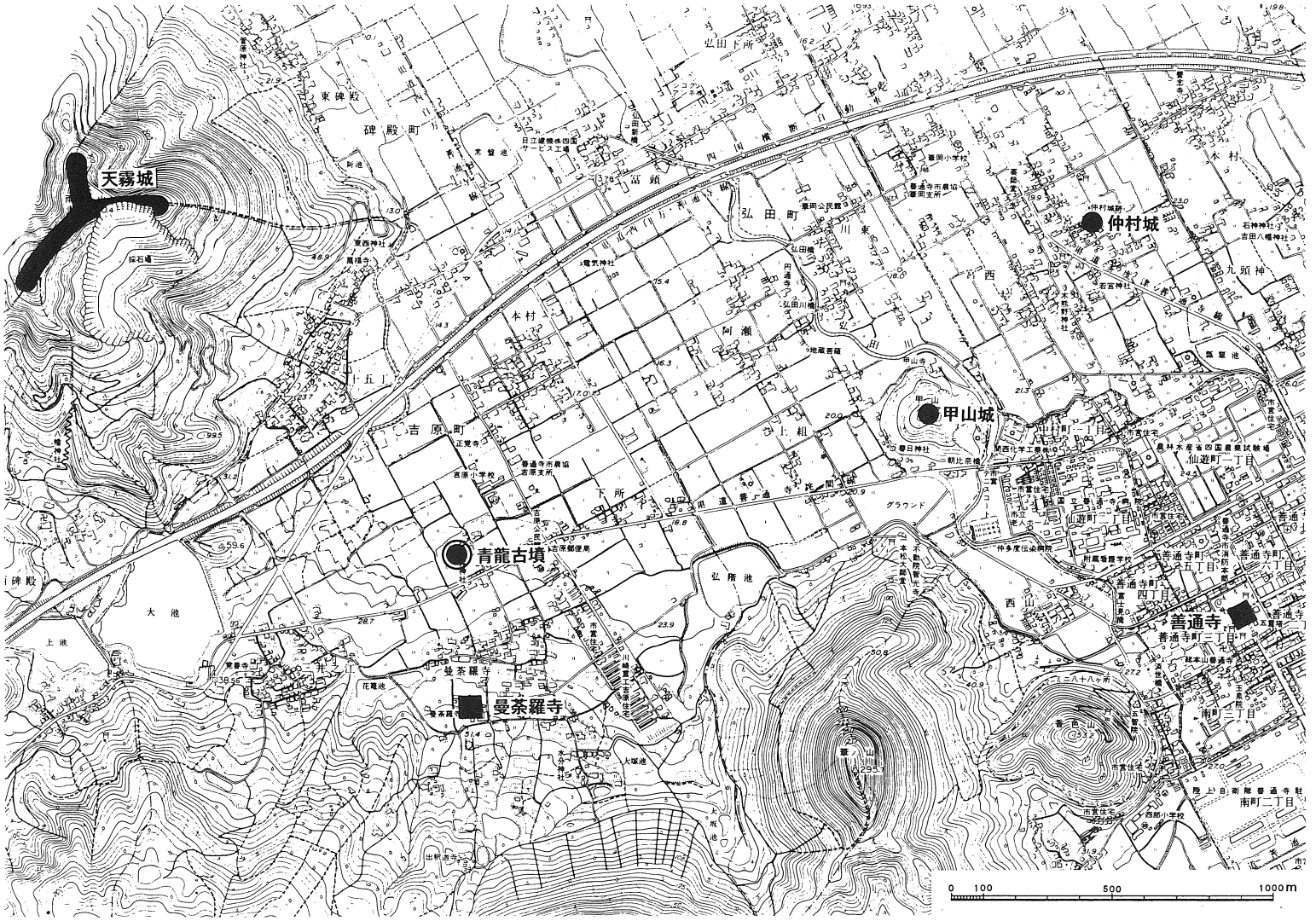
本墳の立地は平野部の奥ではあるが、平地に下る尾根状地形の先端に更に７ｍの盛り土がされている。しかも周辺に視界を遮るものが全く無いため墳頂部からなら一帯を遠方まで見渡すことができ、古墳北側に作られたテラス状平坦部に立てば正面に天霧山を仰ぎ見ることができる。このことから戦国時代における有事に備えた改変とも考えられる。

全国的にも古墳が中世に城として改変され機能し、複合遺跡となった事例は幾つかあるようで、大阪府下を始め、近畿・中国地方にも多数報告例があるが、守護クラスの大規模な居城を始め、国人クラスの居城、陣として利用されたもの等様々である。

青龍古墳を中世の城の要素を兼ね備えた複合遺跡として捉えれば、古墳の外濠と考えられていた遺構は堀であり、周堤は土塁である。墳丘北側平坦部や傾斜地の構造も納得できるが、いずれも城としては規模がかなり小さい。いずれかの紛争の際に陣として俄に整備されたものである可能性もあるが、現在のところ符合する記録は見えない。

また視点を変えれば、本遺跡は整然と区画された条里遺構の端に位置しており、1307(徳治二）年に作成された「善通寺一円保絵図」（重要文化財）には善通寺領を含めてこの付近の様子が記されている。

当時、国衙の圧力により不安定であった善通寺･曼荼羅寺領は所領がようやく確定し、新しく多くの所領が編入され最盛期を迎える重要な時期でもあり、鷺井神社は立地条件やその特異な構造から、荘園制のもとで神社でありながら他の重要な機能を果たしていた可能性も考えられる。



第22図　青龍古墳周辺中世城郭等位置図

第三章　ま　と　め

青龍古墳は我拝師山中腹にある曼荼羅寺あたりから平野部に低く派生した尾根の先端を利用し５世紀後半に築造された巨大な二段築成の円墳で、その周囲には地山を浅く削り込み整形した幅の広い周庭帯を有することが判明した。周庭帯は傾斜地に造られた墳丘を巡っているため、下方はテラス状地形を呈している。

この時期の古墳は県下では数が少なく、しかも周庭帯を有する古墳は知られていない。周濠を有するものも数は少なく、大川町の富田茶臼山古墳の他は善通寺市の菊塚と生野カンス塚、観音寺市の青塚古墳が知られている程度でる。しかもいずれも前方円墳ある。

また、珍しい周庭状遺構を伴う古墳としては高松市南部の三谷石舟古墳が知られているが、その形態を比較するとテラス状遺構を除けば共通性は少ないように思われる。そこで青龍古墳のように円墳で幅の広い周庭帯を有するものがないかを検索していたところ、県教委の國木健司氏から高松市の高野丸山古墳が同規模の円墳で幅12～15ｍの周庭を有すること、傾斜部に構築されているため下方の周庭部はテラス状地形を呈していることなどの類似点があることを御教示頂いた。また、徳島県の土成丸山古墳も同様の形態を呈しているようであり、共通した構築時期や設計思想が考えられる。

青龍古墳の広大な周庭部は、墳丘を構築した際にこれを誇張し明確にするためだけに造られたものにしては規模が大き過ぎる。やはり特別な使用目的を有する施設であると考えた方が妥当であろう。もしそうであるとすれば、秩序を持って前方後円墳並みに計画的に造営された古墳であり、相当の被葬者が想定されなくてはならない。

当時の西讃岐は現在の善通寺周辺を中心に佐伯一族の勢力範囲であり、有岡古墳群がその一代系譜の墓所と考えられている。青龍古墳を築造した集団は、築造する古墳に佐伯氏から前方後円墳造営に制限を受けていた可能性も考えられることから、両勢力の関係は今後大いに検討すべき課題である。

今回の調査の主な目的は青龍古墳の規模や形態の把握であり、墳丘部での発掘調査は行なっていないため、主体部の構造や副葬品については未知のままである。主体部は崩壊部分の露出状況から見ると東西方位であり、その位置から二基存在する可能性もあるが、古い社殿が墳丘上にあったことから破壊されている可能性もある。

今回の調査では、これまで言われて来たような二重の濠を有する前方後円墳ではないことが証明され多少残念なような気もするが、周庭部を含めての全長は78ｍを計り、円墳としては極めて大きく、県下では比類ない存在である。しかも複雑な環境から、宗教施設と中世の戦闘施設との複合遺跡として現在に伝わる貴重な遺跡であることも確認された。

ここで次に検討すべき課題は中世頃の複雑な環境である。後世に青龍古墳に刻まれた事変の痕跡の原因は、前述したように幾つか考えられる。

青龍古墳の所在する場所は善通寺一円の端に位置しており、善通寺・曼荼羅寺領が安定するまでには多くの問題の生じた場所であろう。このような環境下の既存の宗教的施設「青龍権現」が何らかの役割を果たしていた可能性は極めて高い。

次に考えられるのが戦国時代の紛争である。室町期に讃岐の守護細川氏に従い南北朝期に白峰合戦で軍功をあげた香川氏は西讃に領地を得た。更に西讃の守護代の位置を得た香川氏は、讃岐13郡のうち6郡を領有するようになったが、阿波の三次や土佐の長宗我部により攻められている。この香川氏の詰の城が天霧城であったことから、青龍古墳の地形改変は当時の在地勢力や天霧攻めの様子を解明する手掛かりとなるかも知れないが、この場所に陣を示す文献等は残されておらず、今後の研究を期待したい。

いずれにせよ、今回初めて行なわれた青龍古墳発掘調査は極めて軽微な内容であった。今後、何らかの機会に調査が行なわれ、この場所に積み重ね残された各時代の遺構の示す事象が明らかにされる時が楽しみである。

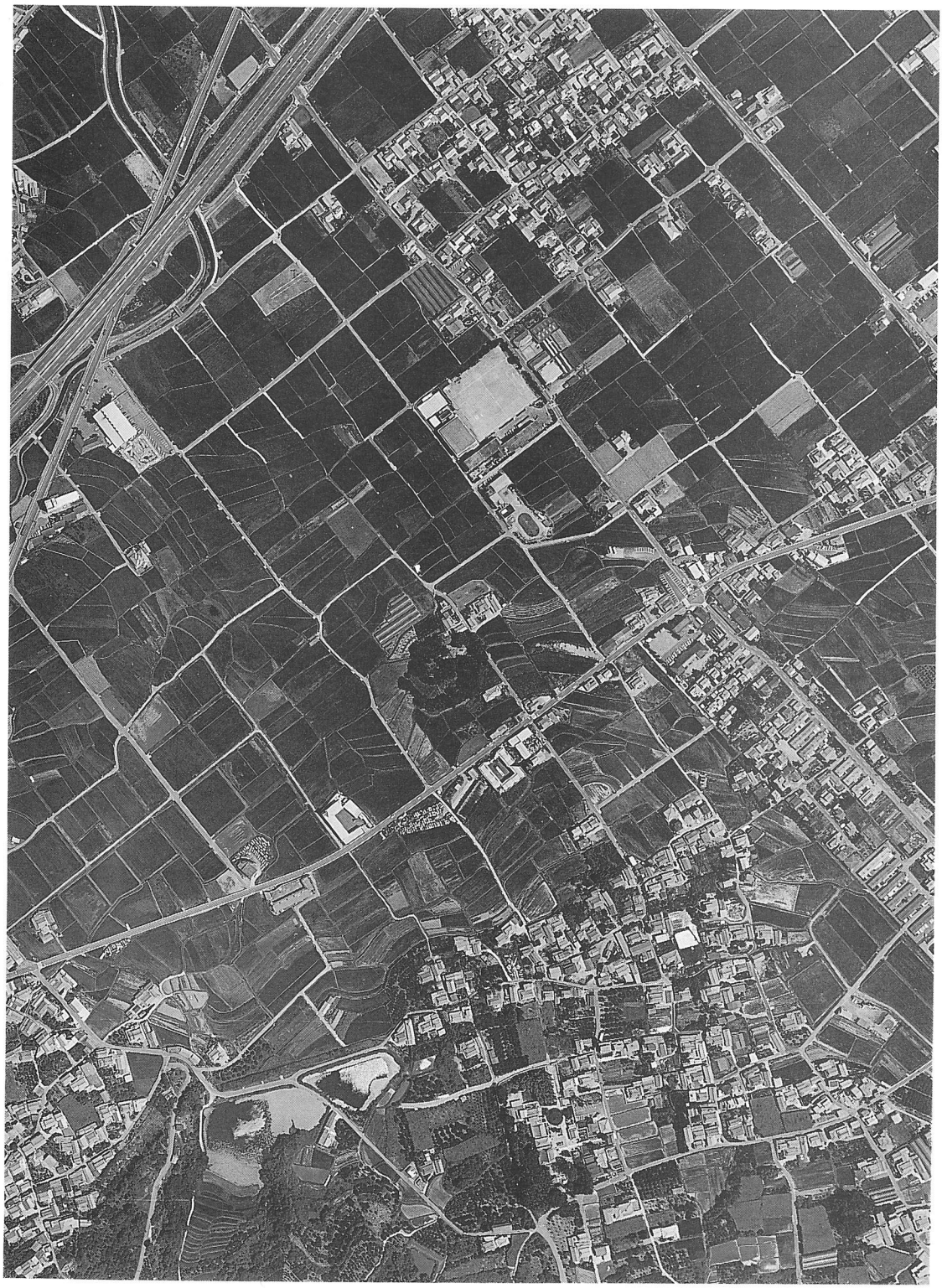
参考文献

壺形埴輪関係　「長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ」1990.3 財団法人大阪市文化協会
「長原遺跡発掘調査報告Ⅳ」1991.3 財団法人大阪市文化財協会
「岡山県史（考古資料）」1986.3 岡山県

中世古墳関係　「徳島考古・第2号」1985.5 徳島考古学研究グループ
「徳島県博物館紀要・第18集」1986.3 徳島県博物館
「三谷石舟古墳測量調査報告書」1992.9 高松工芸高校郷土史研究会
「観音寺市誌」1985.1 観音寺市

中世村落・城郭関係　「微地形と中世村落」1993.8 金田章裕
「日本城郭大系・第12巻」1981.3 新人物往来社
「南海治乱記・上巻」1981.1 香西成資原著・伊井春樹訳
「善通寺市史・第1巻」1977.7 善通寺市

図　　版



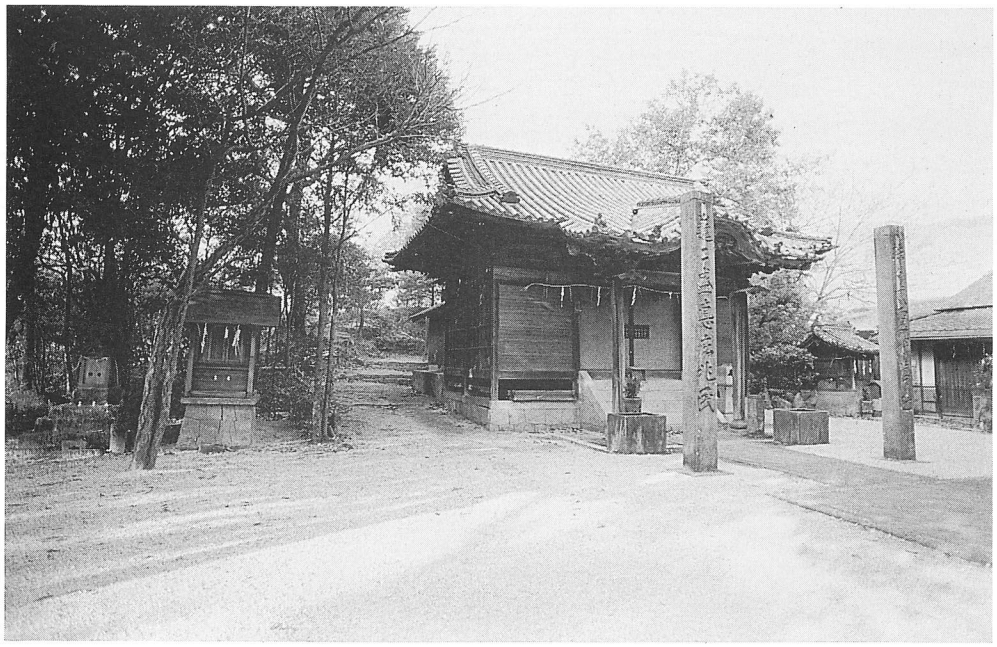
第23図　青龍古墳周辺部航空写真



第24図　鷺の井と青龍古墳遠景 ～東から～



第25図　青龍古墳遠景 ～西から～



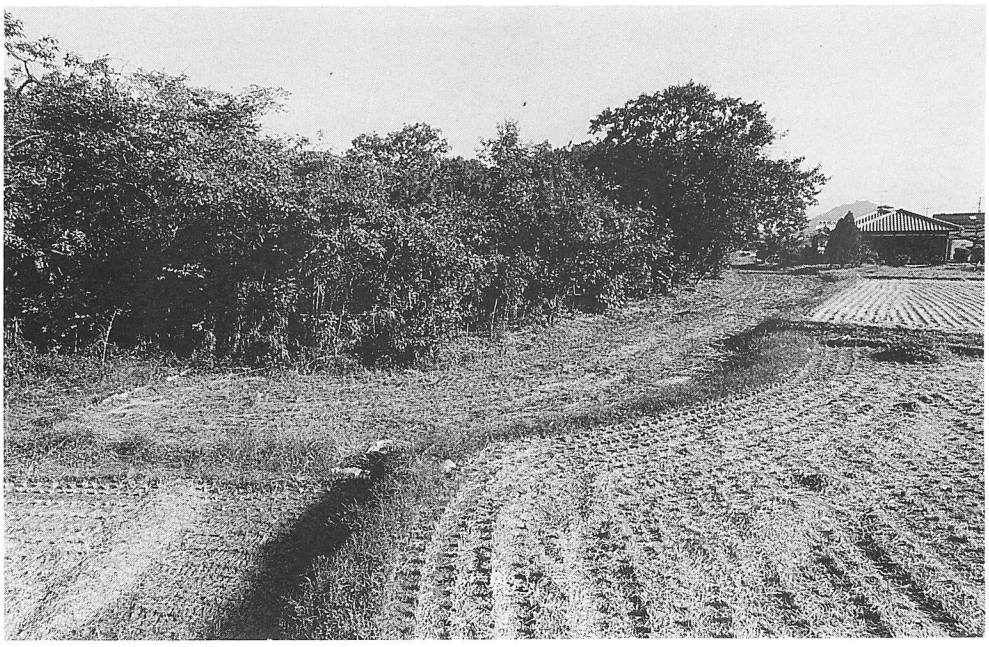
第26図　鷺井神社境内 ～東から～



第27図　鷺井神社裏側に残存する墳丘 ～南東から～
※一部竪穴式石室石材が露出している。



第28図　古墳南端の状況（左から堀と土塁）～北東から～



第29図　古墳南西端の状況（手前から堀・土塁）～南西から～



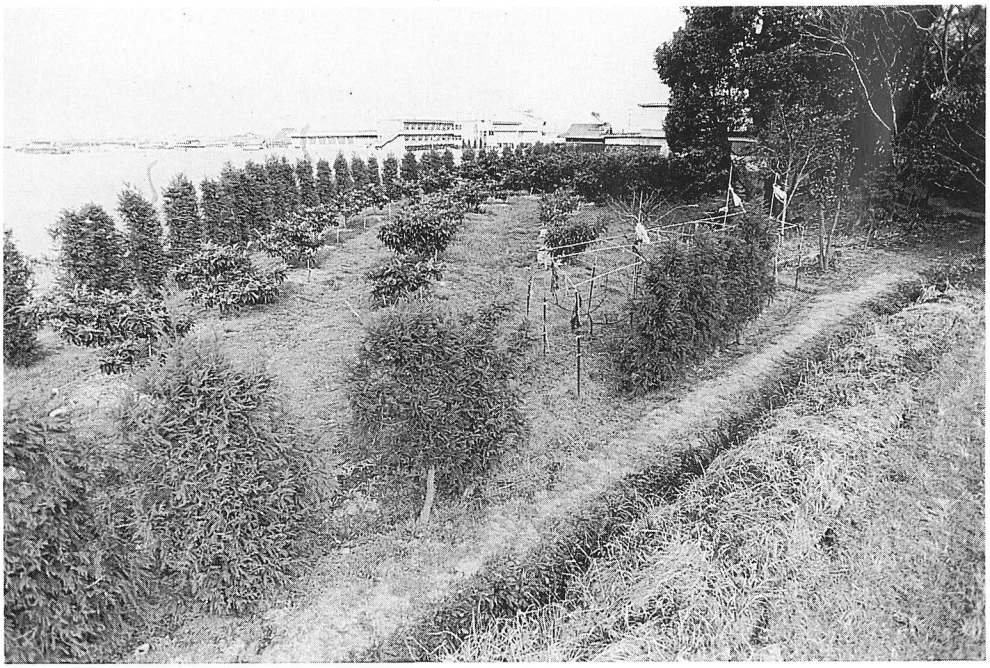
第30図　古墳南側周庭部の状況（左から土塁・周庭部・墳丘）～東から～



第31図　古墳西側の状況（手前から周庭部・墳丘）～西から～



第32図　古墳西側周庭部の状況（左から墳丘・周庭部・土塁）～北から～



第33図　古墳北側周庭部の状況（左から周庭部・改変地形・墳丘）～南西から～



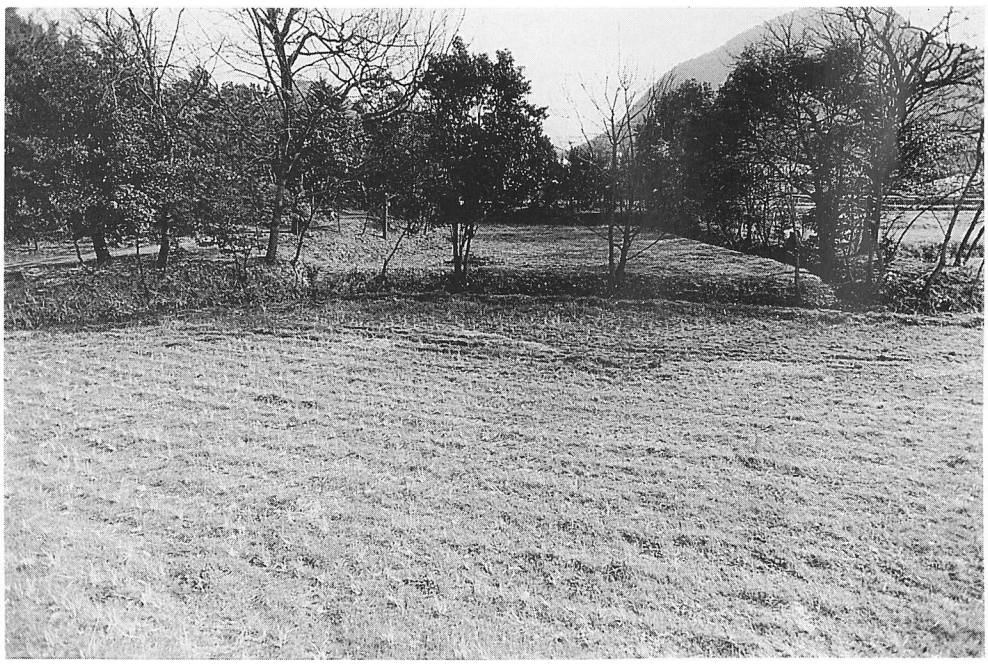
第34図　墳丘北側部の改変地形 ～西から～



第35図　古墳北端の状況 ～西から～



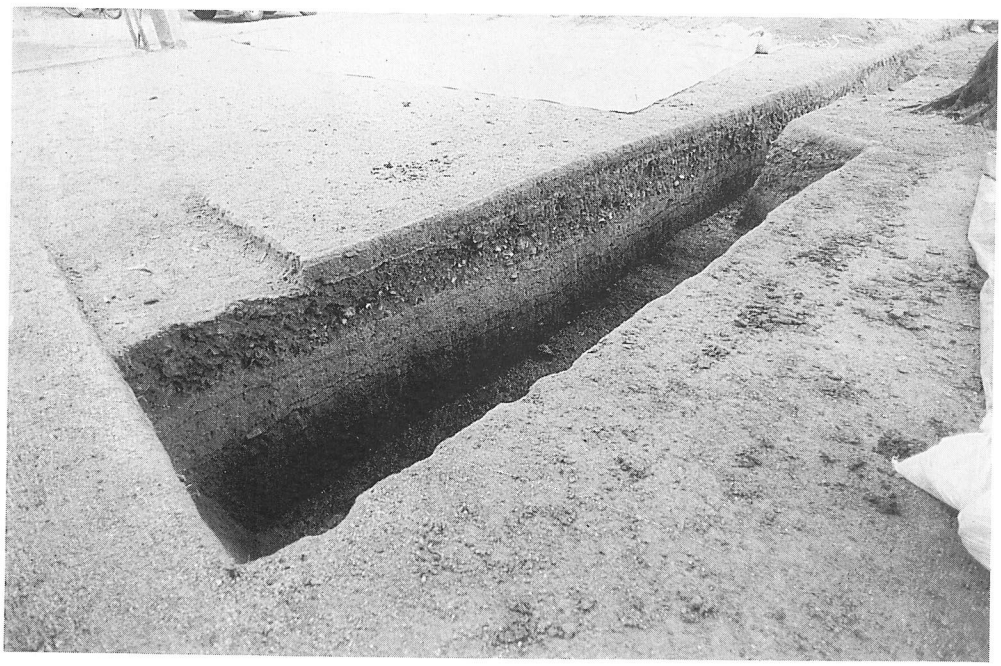
第36図　古墳西端の土塁の状況 ～南東から～



第37図　古墳西端周庭部と土塁の状況 ～北から～



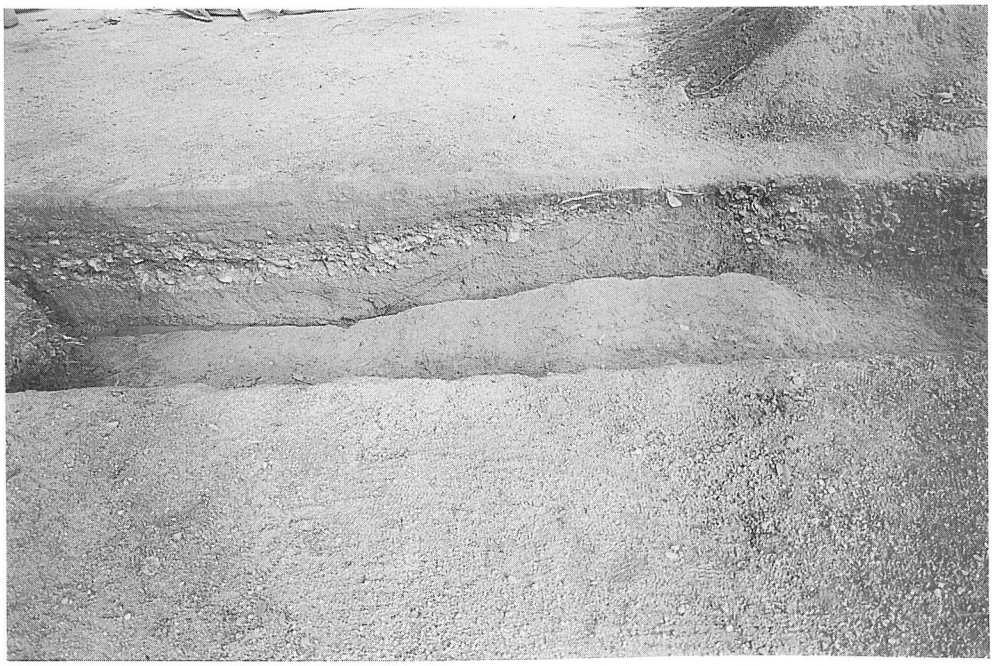
第38図　境内での発掘調査作業風景 ～北西から～



第39図　第1トレンチ西側（周庭部）検出状況 ～南西から～



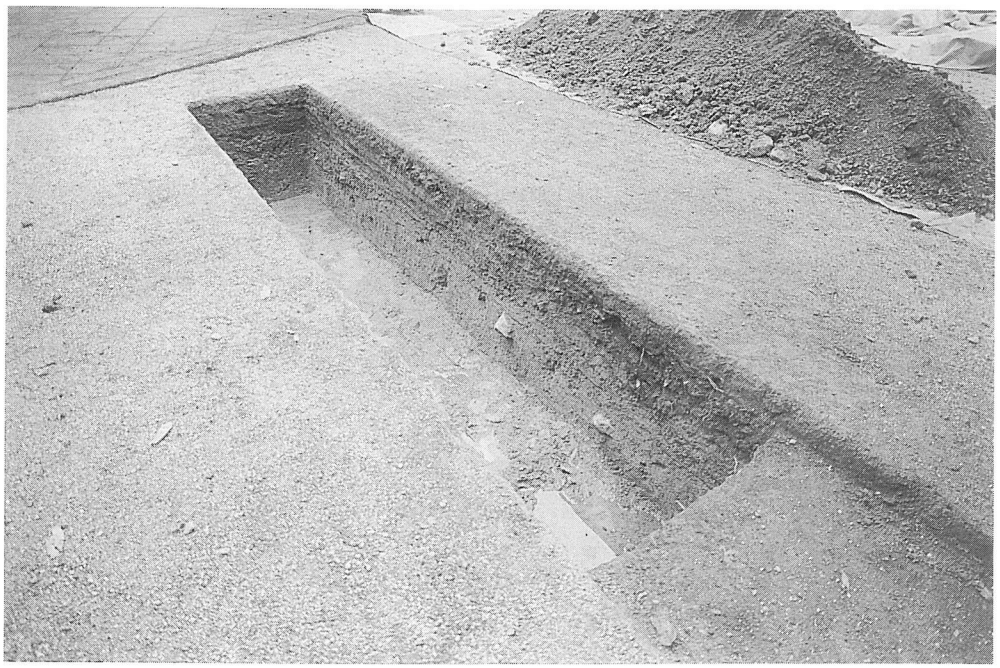
第40図　第1トレンチ東側（土塁と堀）検出状況 ～南西から～



第41図　第1トレンチ東側（土塁断面）検出状況 ～南から～



第42図　第1トレンチ東側(堀と埋土断面)検出状況 ～南西から～



第43図　第2トレンチ検出状況(検出面は周庭部埋土上層) ～南西から～



第44図　第3トレンチ検出状況（墳丘東側周庭部）～北から～



第45図　第4トレンチ検出状況（墳丘北側改変地形）～北西から～



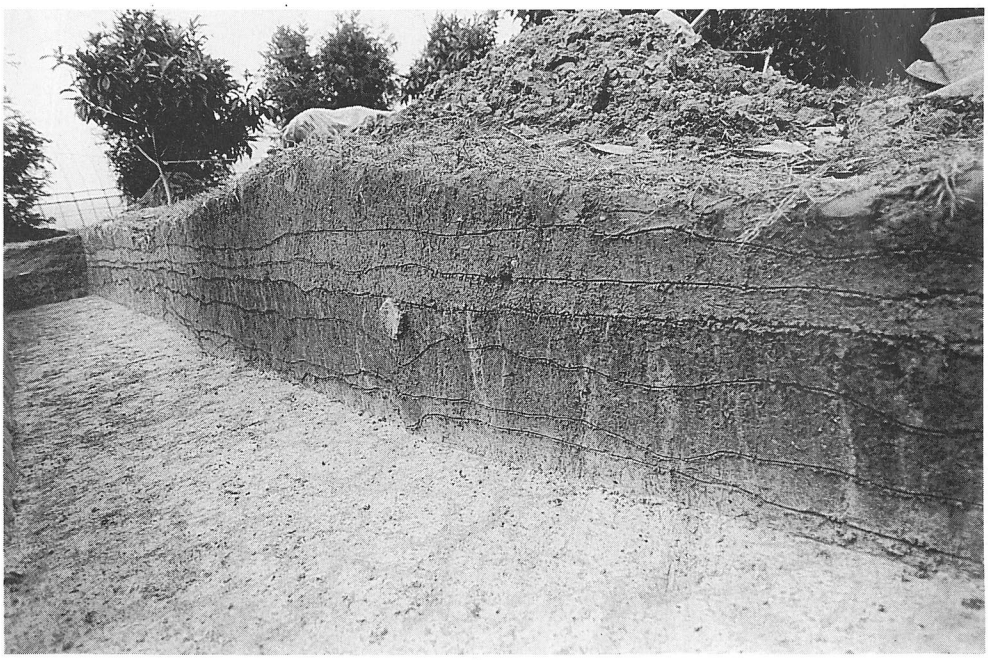
第46図　第4トレンチ南端の版築状土層 ～北西から～



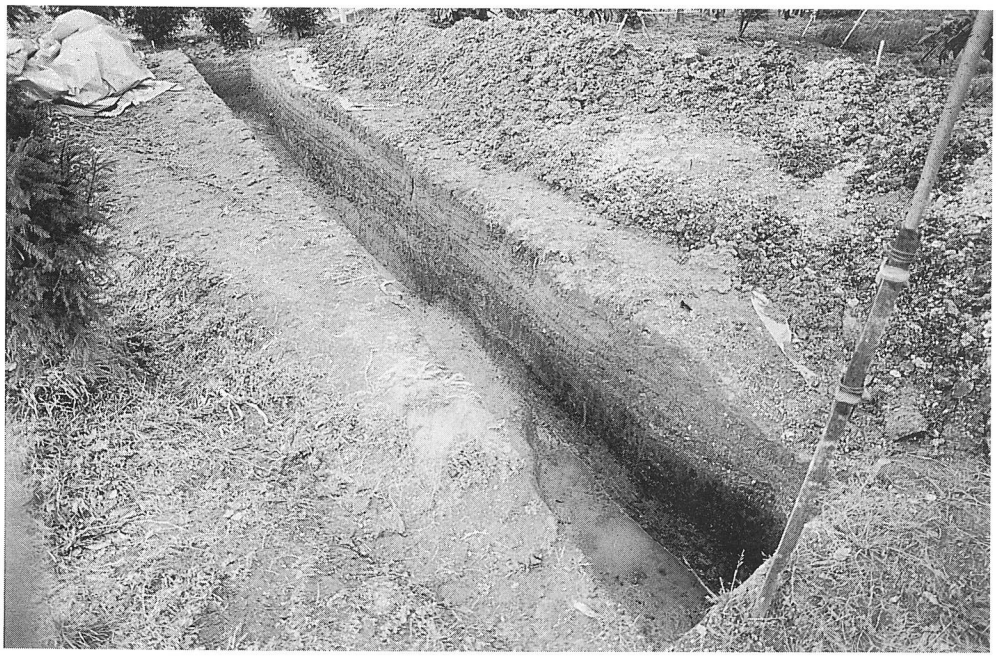
第47図　第5トレンチ検出状況（墳丘北西側改変地形） ～北西から～



第48図　第6トレンチ検出状況(墳丘北側周庭部) ～南から～



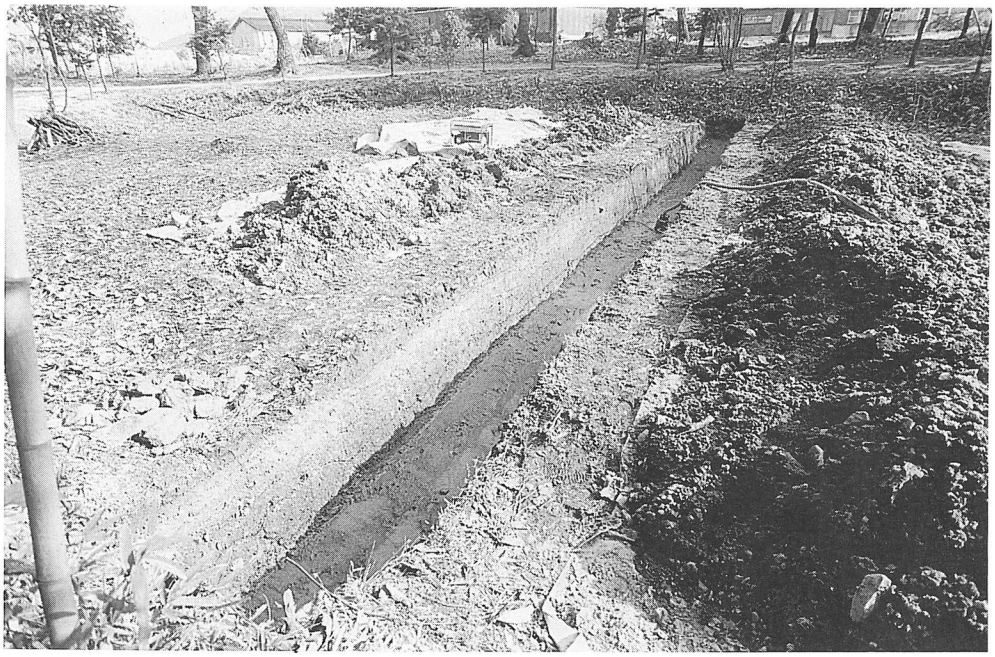
第49図　第6トレンチ土層堆積状況 ～南から～



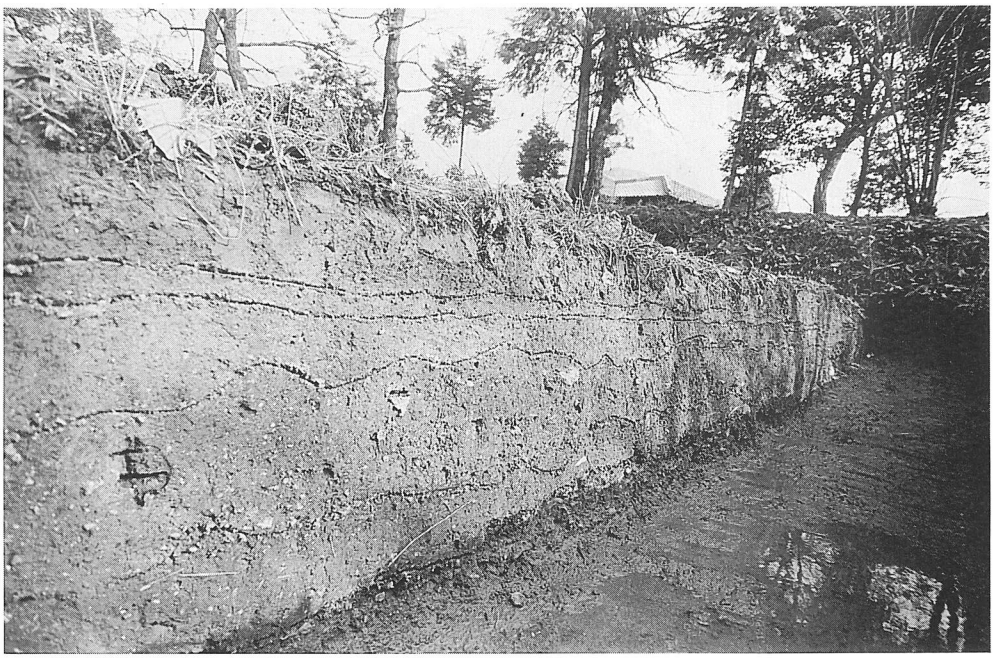
第50図　第7トレンチ検出状況（墳丘北西側周庭部）**～南東から～**



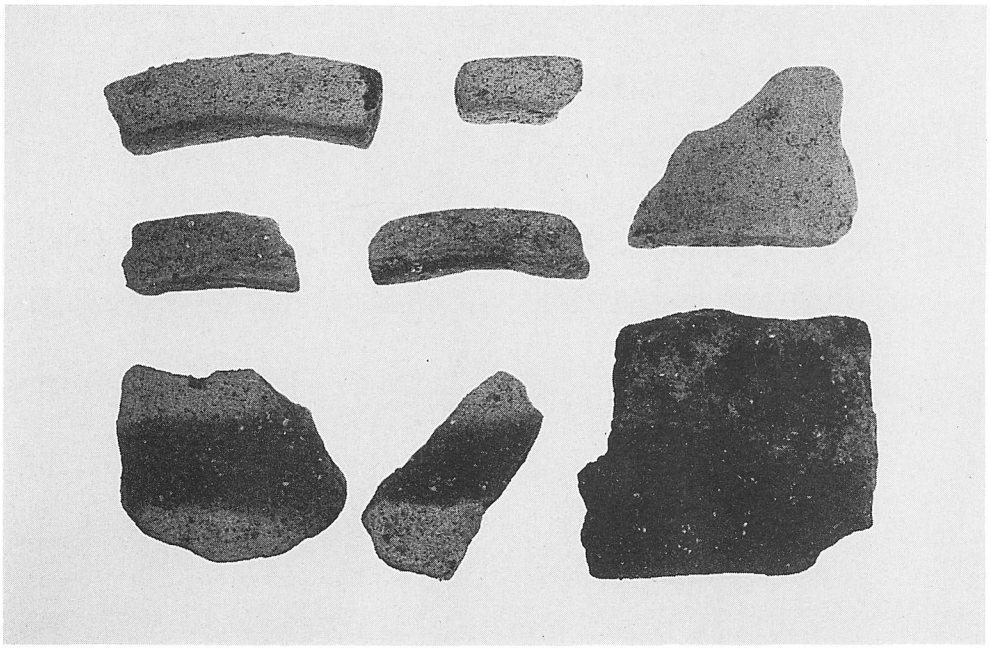
第51図　第8トレンチ検出状況（墳丘南西側裾部・埴輪片と礫の出土状況）**～南西から～**



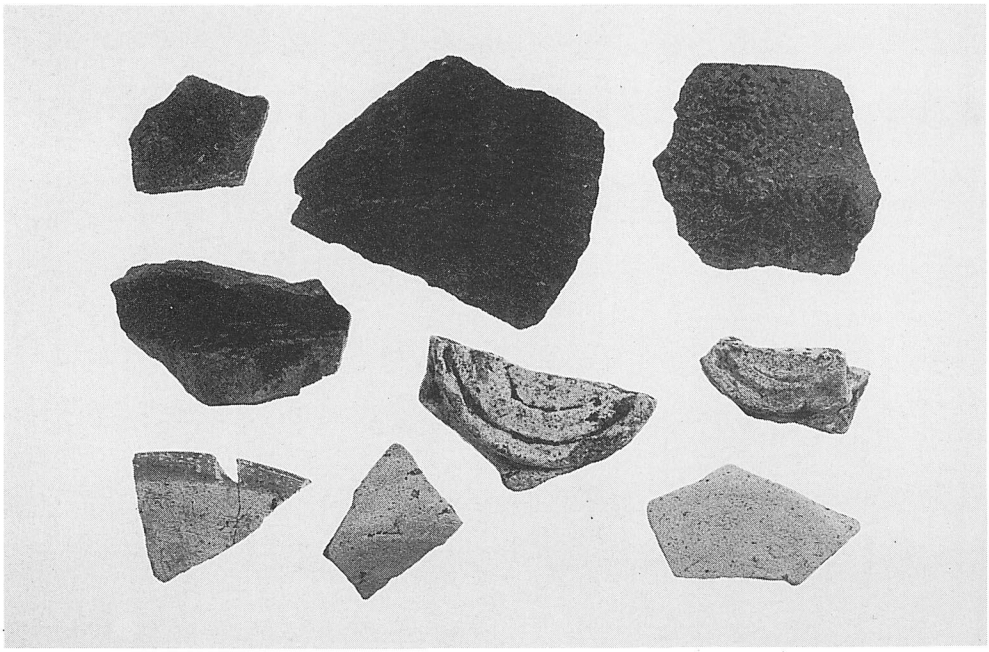
第52図　第9トレンチ検出状況(墳丘南側周庭部) ～北西から～



第53図　第9トレンチ土層堆積状況 ～北西から～



第54図　周庭部埋土下層から出土した埴輪片



第55図　周庭部埋土上層から出土した須恵器及び土師器片

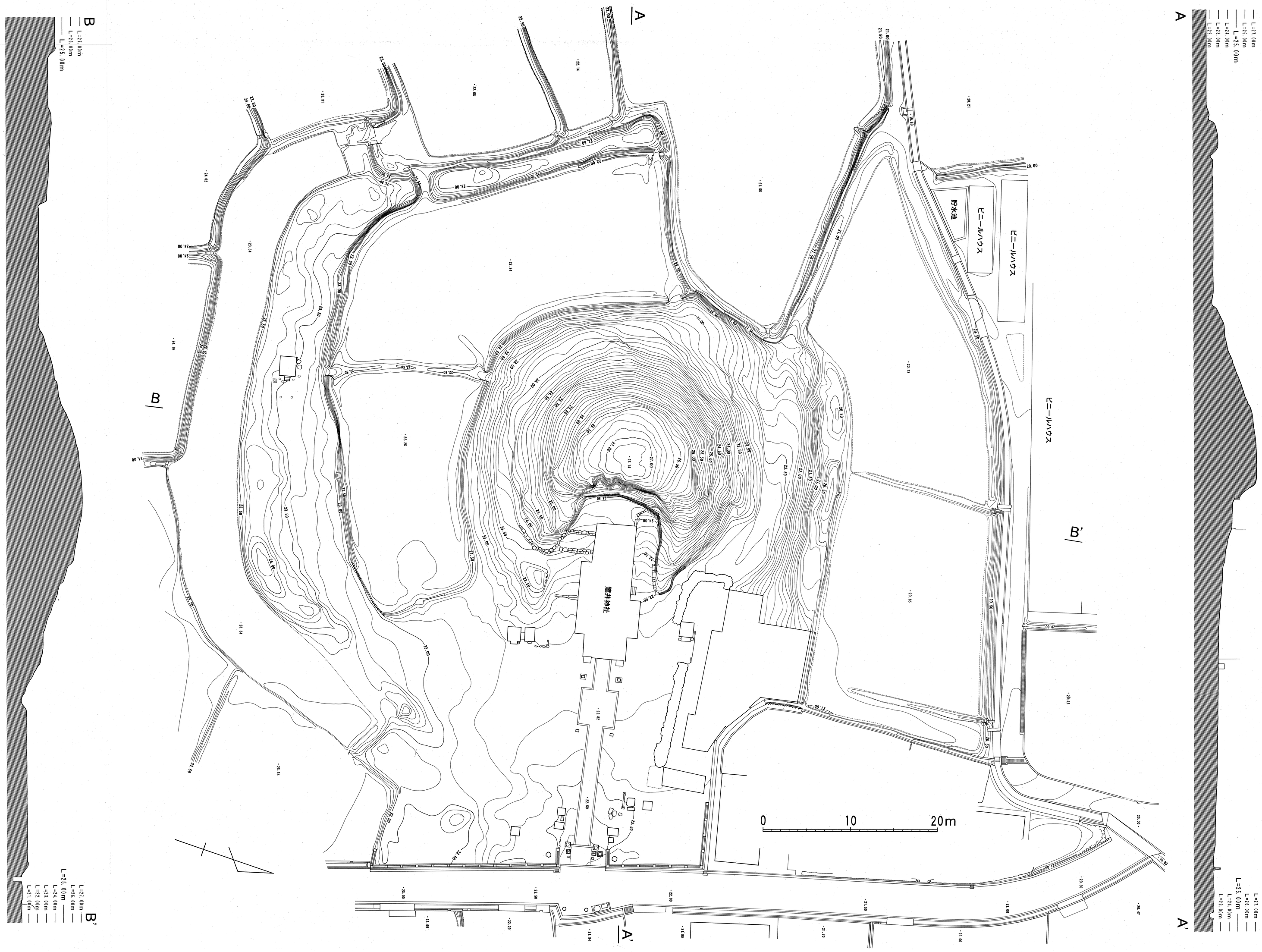
青龍古墳調査報告書

～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～

平成６年３月31日発行

編 集　香川県善通寺市文京町２丁目１番４号
発 行　善通寺市教育委員会　文化振興室

印 刷　㈲ サ カ エ 印 刷　善通寺町1726-2


A
B
A'
B'
ビニールハウス
貯水池
ビニールハウス
豊井神社
0
10
20m
L=21.00m
L=25.00m
L=24.00m
L=23.00m
L=22.00m
L=21.00m

青龍古墳地形測量図